

第一部

東日本大震災を生きる

2011年3月11日に発生した東日本大震災と大津波により、15,854人の尊い生命が奪われました（2012年3月10日現在、警察庁発表）。犠牲者の方々に哀悼の意を表すると共に、ご遺族の皆様にご心よりお悔やみを申し上げます。さらに、3,155人もの行方が依然として不明であり、不安な日々を過ごされているご家族の悲しみを思うと言葉もありません。また、未曾有の大災害とそれに伴う原発事故により、未だに多くの人々が避難生活を余儀なくされています。これらの方々ができるだけ早く平穏な生活に戻れることを切に願っています。

14:46に発生したマグニチュード9.0の大激震により、仙台市では震度6強を記録し、まさに人間が立っていることができない状態でした。揺れの最中に、停電となり、建物の倒壊を危惧しながら、強く長い揺れが収まるのを待つしかありませんでした。既に春休み中であつたため、学部学生数は少なめでしたが、医学部のある星陵キャンパスには、多くの大学院生と教職員が働いていました。激震により仙台市全域が停電となったため、その直後の活動はまさに時間との戦いになりました。すなわち、日没までに、星陵キャンパスにいる学生と教職員の安否確認、各研究室の安全確認などをすべて完了させる必要がありました。全面停電の中、星陵キャンパスでは、東北大学病院と医学部1号館玄関ロビーに隣接する警務員室に非常用電源が備わっており、それらが順調に機能しました。東北大学病院は当然として、1号館の警務員室の非常用電源は極めて重要な役割を果たしました。第一部の冒頭では震災直後に奮闘する教職員の活動が紹介されています。導入文に引き続き、東北大学大学院医学系研究科・医学部の災害対策本部の貴重な記録が掲載されています。（柴原茂樹）

平成 23 年 (2011 年) 3 月 11 日 14 時 46 分

東北地方太平洋沖地震発生

3.11 大震災直後の医学部

◆ 柴原茂樹

東北大学医学部医学科長

東北大学附属図書館医学分館長

The Tohoku Journal of Experimental Medicine

編集長

3 月 11 日

3 月 11 日 (金)、臨床大講堂にて 3 年次の基礎医学修練の研究発表会が実施されていた。午後の口頭発表が終了し、臨床中講堂に場所を移し、14:15 頃からポスター発表が始まった。その時間を利用して、私は、所用のため医学部 1 号館 7 階の自室に一時的に戻った。その直後の 14:46、大地震が発生した。尋常ではない強い揺れのため、本棚に囲まれた危険な教授室を逃れ、隣のセミナー室にある強靱なテーブルの下に、教職員 2 名と共に避難した。もう一人の教員は、実験室内で耐え忍んだ。異様に長い揺れの中、日本の耐震技術に心から感謝した。揺れが収まるのを待って、全員が速やかに屋外に避難した。その際、7 階エレベーターホールの小窓から垣間見た 2 号館と 3 号館の無事な様子に安堵した。幸い、教室員に怪我はなく、5 号館前の集会所にて報告後、全員帰宅させた。その頃、雪が降り始めた。

学生安否確認

ポスター発表に参加していた医学科学生、教職員は全員無事に医学分館前の避難場所に避難していた。基礎医学修練発表会の 3 年次の学生を除き、既に春休み中であつたため、星陵キャンパス構内にいた学部学生は平生より少なかった。震災直後より、電話とメールが不通となつてしまつたが、教務担当職員は学生の安否確認に努めた。その結果、少なくとも医学部構内における人的被害は皆無であることが判明した。一方、沿岸部で活動するボート部とヨット部の学生の安否が懸念された。(備考: 3 月 18 日までに医学部学生全員の無事が確認された。)

停電であること、余震が続いていたこともあり、五十嵐和彦副研究科長、吉田隆幸医学部事務長と相談し、脱出が容易な医学部 1 号館 1 階玄関ロビーを医学部の緊急災害対策本部とした。さらに、1 階玄関ロビーに隣接する警務員室では、非常用電源により電気が使用でき、テレビの情報を入手することができた。従つて、日没後には、警務員室が実質的な緊急災害対策本部となつた。

一方、帰宅困難な学生・教職員のために星陵体育館が臨時の避難所となつた。星陵体育館は、避難所として公的に指定された場所ではないため、学生の自主的な避難から自然発生的に避難所になつたと思わ



写真 1 5 号館から撮影

れる。五十嵐副研究科長と吉田事務長らが、段ボール運びなどで奮闘されていた。仙台市全域のライフラインが途絶えたため、各自が食料、毛布、電灯などを持ち寄りしていた。暖房器具や布団が十分にある状態ではなく、かなり寒い思いをしたはずである。また、学生が自主的に避難者名簿（安否確認を兼ねる）を作成してくれた。この紙面を借り、自発的に協力してくれた学生諸君に深く感謝する。

東北大学附属図書館医学分館

震災直後、医学分館職員は、最優先で利用者の避難誘導に努め、全員無事に避難させた。教務関連の対応のため遅れて駆けつけた私（医学分館長）は、全職員の無事と利用者の避難を確認した。直ちに、医学分館を閉館とし、帰宅困難者と一部の事務責任者を除き、全職員を帰宅させた。医学分館は耐震構造に加え、頑強に設計されているはずであったが、2階と3階の天井に付随した換気装置と防煙ガラスが損傷あるいは破壊されていた（備考：後日、天井からの落下物の危険が大きいという理由で、医学分館は黄色紙の注意判定を受けた）。さらに、2階と3階の書架にある本の大半が落下し、通路を塞いでいた^(写真2)。一方、書架（本棚）自体は転倒もせず、無事であったため、はからずも書架の固定が適切であったことが実証された。すなわち、1978年の宮城県沖地震（マグニチュード7.4）の経験が活かされたことを実感した。

医学科長の職務上、教務室との連絡を密にする必要があったため、医学部1号館玄関ロビーに隣接する警務員室を医学分館の緊急災害対策本部とした。電気が復旧した翌12日に、医学分館に緊急災害対策本部を設置した。さらに、高橋信野・医学分館事務長及び医学分館職員の心意気とご尽力によって、週明けの14日（月）の午後には、1階のみではあるが、開館することができた。従って、大震災後の早い時期から、新聞の閲覧、トイレの使用など、利用者へ、つかの間の憩いの場を提供することができた。なお、1階をラーニング・コモンズ（パソコンやテーブルなどを配置した自由空間）として活用していたことが役に立った。

研究室の惨状

3.11の日が暮れないうちに、安全確認を兼ね、人事係・佐々木律さんと教務係・和田英哲さんと一緒に（単独行動は危険なため）1号館の被害状況を調査した。階段の壁にはひび割れが多数あり、壁の一部の剥離、脱落が見られた。当然ではあるが、上層階ほど研究室の被害は甚大であった。7階にある私の研究室（分子生物学分野、旧・応用生理学）の惨状も確認した。危険な試薬などはしかるべき薬品庫に保管してあるため、多数の試薬ビン等の破損にも拘らず、異常な刺激臭などは無かった。種々機器の落下・転倒、書籍類の散乱、冷蔵庫などの警報音を除けば、比較的安定した状態であった。冷蔵庫の扉が開き、試薬や試料が床に散乱していた。大雑把にそれらを拾い上げ、無意味とは思いつつ、単なる入れ物と化した冷蔵庫に戻した。警報音の鳴る



写真2 落下した書籍が書架間の通路を埋め尽くしていた。写真は、Tohoku University Medical Press（東北ジャーナル刊行会）の許可を得て、Sakamoto K. et al. (2011) Tohoku J. Exp. Med. 225, 77-80. より転載。

冷凍庫は、低温状態ができる限り維持されることを願い、そのまま放置した。なお、案の定、教授室は落下書籍と転倒本棚で埋め尽くされていた。

The Tohoku Journal of Experimental Medicine 編集部

The Tohoku Journal of Experimental Medicine は 1920 年に創刊された、我が国が誇る英文総合医学雑誌である。震災当時、The Tohoku Journal of Experimental Medicine 編集部には、2 名の職員が働いていた。彼女らも無事であり、直ちに帰宅させた。1 号館 2 階北側に位置する編集部では、書籍等が床に散乱していた。女性職員にはまさに荷が重いと考え、同行してくれた警務員の方と転倒していたロッカーなどを元に戻すなどの力仕事のみをこなして、退出した。幸い、2011 年 3 月 8 日付けで、3 月号掲載論文のすべてのオンライン公開を終えていたため、著者に迷惑をかけることは回避できた。奇しくも、3 月 11 日付けで、4 月号の最初の 2 編がオンライン公開されていた。震災などの災害時における電子ジャーナルの利点を再認識した。また、この大災害の一端を世界に発信することも、編集長としての重要な責務であると強く感じた。

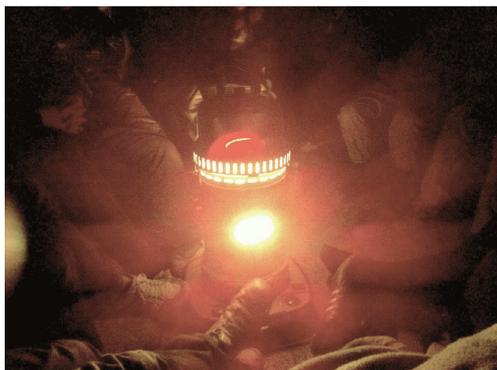


写真 3、4、5 震災当日 21:00 頃の 1 号館 1 階玄関ロビーの様子。

約 40 名の学生、大学院生達が、2 台の石油ストーブを囲み、一夜を過ごした。暗闇の中、自動扉近くの天井に設置されている非常灯の明かりが、ロビーを照らしていた。

(写真 5 は Tohoku University Medical Press (東北ジャーナル刊行会) の許可を得て、[Shibahara S.\(2012\)Tohoku J. Exp. Med. 226, 1-2.](#)より転載。)

医学部 1 号館 1 階玄関ロビー

大震災に伴う停電下では、日暮れと共に、できる事が限られてしまう。小雪が舞う寒い夕暮れであった。40 人前後の学生達が 1 号館玄関ロビーで、寒さと余震に震えながら、2 台の石油ストーブを囲んでいた^(写真 3-5)。1 号館玄関ロビーを避難所として開放していたわけではないが、震災直後より、僅かな暖房と安心感を求めて、学部学生、大学院生、留学生などが集まっていた。依然としてライフラインは途絶えたままであったが、井戸水利用のおかげでトイレは使用可能であった。時々、避難所と化した星陵体育館の情報が入ってくるだけで、状況に大きな変化はなかった。結局、1 号館玄関ロビーと星陵体育館で、学生達が一夜を明かすことになった。一方、1 号館玄関ロビーに隣接する警務員室では、テレビのニュースに釘付けとなっていた。テレビ画面の上に表示される「仙台市の沿岸地域に 100~200 体の遺体が認められる」といった内容の不気味な文章を、現実として理解することができなかった。なぜ救出しないのか、不可解な思いで眺めていた。また、気仙沼における津波火災の映像に、暗澹たる気持ちにさせられた。

煌めく東北大学病院

震災から 9 時間が経過し、3.11 が終わろうとする頃には、既に雪は止み、大停電のおかげできれいな星空を見ることができた。漆黒の闇の中に大学病院だけが、明るく凛として存在していた。多くの医療スタッフが夜通しで働くのであろうと、感謝の気持ちを抱くと同時に、大いに勇気づけられた。信号機も機能していない暗闇の中、大学病院前の 48 号線 (北 4 番丁通り) を注意深く横断し、家路についた。

基礎医学修練発表会での被災

堀井 明 分子病理学分野

基礎医学修練発表会は医学科3年次学生の11月からの16週間にわたる基礎医学修練の成果を学会形式で発表するもので、学生たちによる手作りの発表会である。2009年3月から開催されるようになり、2011年は3回目であった。実行委員会の学生達は、前年までの様子を聞きながら、自分達の工夫を凝らした会を企画した。発表会は3月10日(木)、11日(金)の2日間で、口頭発表(臨床大講堂)が52名による39演題、ポスター発表(臨床中講堂)が17演題であった。通常の学会形式で開催され、学生が座長を務める。審査委員は学生と教員で、口演、ポスターそれぞれから優秀発表賞が選ばれる。発表内容には未発表データも含まれるため、学生には機密保持も課せられる。口演では十分に準備した学生達がパワーポイントを駆使して最新のデータも織り交ぜ発表し、質疑応答もきわめてレベルの高いものであった^(写真1)。口演は14時に終わり、15分の休憩の後、ポスター会場では熱心な質疑応答が始まっていた^(写真2)。当日は、このまま、投票による優秀ポスター賞も決まり、最後に表彰式で平成22年度の医学科3年生の授業が滞りなく終わるはずだった。

地震の直前、私はポスターの前で学生に質問していた。他の教員達は、表彰式前のわずかな時間を利用してそれぞれの研究室に戻っていたようだ。午後2時46分、突然、下から突き上げられるような激しい揺れが始まり、その後の強い横揺れはこれまで経験したことのないものであった。まるで、振盪機に揺られているような感覚であった。2日前の3月9日(水)にも強めの地震があり、最初は、その余震かと考えていたが、とにかく長い。ポスター会場に使用した教室には固定式の机は無く、揺れのために立っていることもできず、柱の近くにいた学生たちはつかまって何とか立っていたが、教室内の多くの学生たちは跪いて何とか揺れに耐えていた。女子学生たちの多くは教室の真ん中あたりにかたまっていて、皆の顔には極度の恐怖感が見られた。2月22日にもニュージーランドの地震があり、多くの方々が亡くなったが、そのときのニュース報道の壊れたビルの光景が皆の頭をよぎっていたのではないかと思う。臨床中講堂は2階建の講義棟の2階。教室が壊れるのではないかと不安もよぎる。揺れの最中に天井の蛍光灯が点滅し、ついには停電。頭の中には地震の規模などを考える余裕は無く、とにかく全員無事に脱出するためには何をするかのみを考えていた。揺れが続く中、非常口近くにいた学生達はドアを開けることができ、暗くなった教室に光が差し込んだ。建物や非常階段の崩落の可能性なども考えられたが、4、5人ずつで非常口外にある非常階段を使い図書館横のスペースに脱出した。この時の学生諸君のチームワークはずばらしく、全員、怪我無く脱出でき、本当に安堵した。他に教員がいなかったことなど気付く余裕はなく、学生たちがどのような状況かの確認をしている最中に、応援の事務、教員が駆けつ



写真1 2日目午後の口演発表風景。学生が研究成果を発表している。手前には座長を務める発表会実行委員の学生がおり、司会進行役である。また、審査委員席には前列に筆者(奥)と柳澤輝行教授(医学科運営委員会委員:手前)、2列目に柴原茂樹教授(医学科長:奥)と小野栄夫教授(医学科運営委員会基礎小委員長:手前)が写っている。(3月11日午後1時41分撮影)

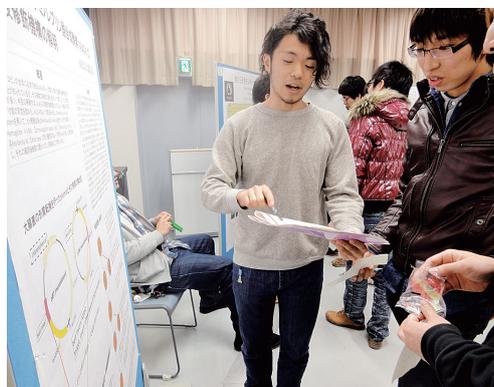


写真2 2日目午後のポスターディスカッション風景。どのポスターの前でも多くの学生たちによる熱心な質疑応答が行われていた。(3月11日午後2時19分撮影)

けてくれて、教員は自分しかいなかったことに気がついた。講義棟横の医学部3号館からも続々と教職員達が脱出してきた。

学生たちの様子を見ながら、しばらく外で経過を見ていたが、何度も余震が続いた。また、医学部の研究棟で窓ガラスが割れているのも見え、建物から離れたところに集まった。多くの学生たちも携帯電話で連絡を取り始め、私も、余震の最中に家族への携帯電話で連絡できたが、その直後からはほとんど通じなくなった。小雪も降ってきたが、余震はおさまりそうもなく、学生達の多くはコート類も荷物も何もかもポスター会場の隣の臨床大講堂において脱出したため、寒さに震える学生も増えてきた。そこで、余震の危険性を払拭できないままではあったが、応援に駆けつけた教員と相談し、揺れの合間に、4、5人ずつの学生グループに分けて交代で教室に荷物を取りに行くこととした。この時に大きな余震が来て何らかの人的被害が発生する可能性も考えられ、この時の判断が正しかったかどうかの答は永遠に来ないであろうが、この時点での判断として、今でもあれしかなかったと考えている。万一に備え、非常出口の外には交代で教員と学生が待機した。暗闇の中、学生達は携帯電話の灯を頼りに教室内に入った。この時に気付いたが、教室のカーテンの開閉は電動式で、停電時には開けることができない。そこで、教員で相談し、危険回避のため手近のカーテンを破いて光を入れた。今後の教室設計にはこの点の工夫も重要であると考えられる。全員が無事に荷物を取り出した後、4月4日(月)に元気に再会することを誓って解散した。しかし、被害は甚大で、新学期的授業再開は4月25日へ遅らせざるを得なかった。今回の地震はマグニチュード9という観測史上最大規模で、震源地をずらしながら数分おきに3箇所連続する地震が発生し、5～6分揺れたようだ。しかし、学生たちと一緒にすごしたあの時間はもっとうんと長い時間に感じた。

その後の学生達であるが、停電、断水の中、おのおのの家から役に立ちそうなものを大学に持ち寄り、医学部1号館ロビーや星陵体育館で力を合わせて難局を乗り切った。そして、星陵体育館は翌週の木曜まで避難所として機能した。その間の学生たちの自治はすばらしく、炊き出しでは恩恵にあずかかった近隣の人たちも少なくなかった。そして、学生たちは、順次、帰省の便を確保し、それぞれの実家へと帰っていった。

今回の被災により、教室の停電対策や避難マニュアルの整備がきわめて重要であるとの教訓を得た。

(1) 停電対策

今回は臨床講義棟であり、窓があったが、カーテンが電動式のため、停電時には開けることができない。やむを得ず破くことで光を入れたが、電動だけでなく手動でもカーテンの開閉ができることは重要である。また、第一、第二講義室などのように窓が無い教室で被災した場合、あるいは、夜間に被災した場合などは、暗闇でパニックになった学生たちが出入り口に殺到する中での二次災害の危険性もある。した

がって、停電時に自動的に自家発電による照明が点灯するしくみ、これが無理でも、市販品のコンセント差込式で停電時に自動的に点灯する電灯などの整備も重要であろう。これは、カーテンの開閉が電動式・手動式の双方に対応できない場合にも有効である。

(2) 避難マニュアル

震災前、学内の避難場所は5号館前のスペースだけであった。しかし、今回のような震災のときに臨床講義棟から5号館まで全員で移動することは現実的ではないし、この指定避難場所も教員・学生に浸透していなかった。我々は最寄りの安全な場所と考えて図書館横に避難した。現在はマニュアルが整備され、学内の指定避難場所も被災場所に応じた形で制定され、図書館横のスペースも指定避難場所に制定された。これらは避難場所として明示され、各教室にも避難マニュアルが掲示されるようになったため、将来の災害時には有効に機能するであろう。自然災害は時を選ばないため、各自の居住地付近の緊急避難場所を知っておくように指導することも重要である。

医学系研究科における 東日本大震災の記憶

吉田隆幸 前医学系研究科事務長

その時、突然、事務室に激震が走った。

3月11日（金）午後2時46分、たまたま1階の事務室（財務室）に降りた時、突然大きな揺れに見舞われ、事務職員全員が机の下に身を潜めた。

渡邊芳男財務室長が「ガスの元栓を閉めろ！」と大声で叫んだものの、机の下から出て立つことすらできないくらいの揺れのため、自分が恐る恐る歩いて元栓を閉めた。

その後もなかなか強い揺れが収まらず、このままでは建物が崩壊して押し潰されてしまうのではないかと思った。

ようやく一時的に強い揺れが収まったため、全員が正面玄関前の芝生に避難した。その直後にも激しい揺れに襲われ、屈んだり悲鳴をあげる職員もいた。咄嗟に耐震性が低いとされている2号館と3号館に目をやると、2号館が左右に大きく揺れていたものの、倒壊することはなかった。

急遽、1号館玄関ロビーに災害対策本部を設置した。

その後、柴原茂樹先生や張替秀郎先生ら数人の先生方が1号館玄関ロビーに集まり、「災害時の対応マニュアルでは、どのようなことになっているのか。災害対策本部の設置はどうするのか。」と話され、震度5弱以上で災害対策本部を研究科長室に設置することになっていったため、2階の自室に行って対応マニュアルの冊子を持ってきて内容



震災翌日の5号館8階環境保健医学分野事務室。耐震対策を施していた棚が倒れ、机上のパソコンも落下した。



3月11日 5号館生物化学分野の様子

を確認した。自室では、机上に重ねていたほとんどの書類が床に散乱していた。

その間にも身に危険を感じるような余震が続いていたため、いつでも避難できるように急遽玄関ロビーの入り口にあったテーブルのもとに、暫定的に災害対策本部を設置して、各分野等からの教職員等の安否確認に当たった。その確認には、研究協力係の高田宏行係長に取りまとめてもらった。

教務室職員は学生の安全確保のため、財務室職員は建物内の安全管理のため、それぞれ各室長の指揮のもとに現場に急行して状況確認を行い、玄関ロビー内の災害対策本部に逐一報告された。物的被害は大きかったが、人的被害は無かった。

外を見ると牡丹雪が舞っていて、避難した大勢の教職員や学生が濡れて震えていた。このため、一時的に玄関ロビー内に入るよう呼びかけ、続々と駆け込んできたものの、度重なる余震で玄関ロビー内も落下物の危険性が高まったため、又外に出るよう必死になって声をかけたりした。幸い玄関ロビー内への落下物は無く、壁面のタイルが数か所剥がれ落ちた程度であった。

1号館前庭には多くの教職員や学生が避難してきたが、建物の倒壊やガラスなどの落下が危惧され、張替先生から本来の避難場所である5号館前の駐車場に全員を移動させるように話され、全員を誘導しながら5号館前の駐車場に移動した。マニュアル上は避難場所がこの1か所のみで、余震が続く中を時間をかけて避難してきた教職員や学生がいたため、後日になって構内の数か所に適切な避難場所を設定することになった。

星陵地区部局の窓口になって被害状況を本部事務機構の 災害対策本部に報告した

夕方近くに関根新市財務部長が駆けつけてきて、医学系研究科内の被害状況や困っていることなどについて尋ねられた後、星陵地区部局の人的、物的被害状況を把握して、本部事務機構の災害対策本部に報告してほしい旨話され、しばらくの間、毎日夕方1回は加齢研、歯学研究科、大学病院の各災害対策本部を訪れ、被害状況等を聴取して報告していた。幸い各部局とも人的被害が無かったので安心した。その後、総長室の事務職員2人も駆けつけてくれた。

事務部では、夕方に各研究室等内での避難確認と火気等の点検のため、ヘルメットを着用して2人一組で懐中電灯の照明を頼りに、余震の中を各研究棟の最上階まで階段を昇り、フロア毎に「誰か居ませんか～」などと声を掛けながら見回った。ほとんどの研究室や実験室内は、入室することが困難なくらいに多くの書棚や実験機具等が転倒・散乱していて、足の踏み場もない状態であった。そんな中、超低温装置が発する危険信号音が、暗い研究室や実験室から不気味に鳴り響いていた。



星陵体育館での避難の様子

星陵体育館を学生の避難所に利用した

震災当夜から不安がる学生たちが1号館玄関ロビーに集まり、寝袋等を持参して寝泊りするようになった。しかし、気温も下がり寒さが感じられたため、教務室職員の提案で入試用のストーブ2台に灯油を入れて使用してもらった。このような状態は、各方面からの支援物資が届き始まるまで続いた。

同時に帰宅できないなどの学生に対して、星陵体育館を開放し避難所として利用させることになった。また、学生から体育館前で炊き出しをしたいとの積極的な要望が出され、先生方と相談の上、火気に十分注意することを条件に認めた。

夕方、体育館の様子を見に行くと、学生が自発的に入館者の受付を行っており、大勢の学生が真っ暗な体育館の床の上で不安げに寒さを凌いでいた。このため、1号館玄関ロビーと同様に教務室職員を中心に入試用のストーブ3台を運んで暖を灯した。しかし、ほとんど全員が暖を取ることができなかった。

その後、体育館の床で少しでも寒さを凌げるようにとの思いから、みんなで保健学科看護学専攻の授業等で使用しているモーフや小児用の布団などをかき集め、体育館に運んで学生に使ってもらったが、避難学生全員には到底行き届かなかった。

なお、真っ暗な体育館には、一般市民の方々も避難してきており、ある年配の方から「折角避難してきたのにモーフの1枚も無く、このままでは寒くて死んでしまう。代表者と話したいから早く呼んでこい。」と怒鳴られたものの、この体育館は一般市民の避難所として指定されている所でないことを時間をかけて説得し、なんとか納得してもらった。

翌日、医療廃棄物用の段ボールが多数事務部の倉庫にあったことに気づき、これを体育館の床に敷いて少しでも寒さを凌いでもらうよう、みんなで段ボールをリヤカーに積んで体育館に運んだ。

各方面からの心温まる支援物資に感激した

山本雅之研究科長や宮田敏男先生などのお力添えで、各方面からの支援物資が毎日のように大型トラックで届いた。

その第一便は、山本研究科長が東京から自衛隊車両に先導され、大型トラックに布団540組と毛布2,000枚を積んで東北自動車道を運んできた。このことは文科省内でも知ることとなり、後日の文科省ヒアリングの際に担当官から「山本先生の行動が文科省では伝説になっています。」と話された。支援物資の中には、宮田先生などが各方面に必死になって支援を懇願したこともあって、大量の非常食品はもとより、岡山の農業高校からの米3トンや大学研究室で募ったチョコレート、キャンデーなど、心温まる支援をいただき、みんなで感激した。輸送されてきた段ボールには、励ましのメッセージが添えられていた。

なお、これらの大量の支援物資は、渡邊財務室長が中心になって一つ一つ分けられ、医学系研究科の全分野はもとより、星陵地区各部



3月12日 5号館生物化学分野の様子



3月12日 5号館公衆衛生学分野の様子

局等にその都度配給された。

余震のたびに1号館階段の壁面の亀裂が気になった

教職員や学生は、どの研究実験棟でも停電のためエレベータが使えず、階段を徒歩で昇り降りしていた。しかし、1号館階段の壁面にはどこの階も大きく亀裂が入っており、余震が起こるたびにコンクリート片が落ちて、階段を白く染めていた。

このため、昇り降りする教職員や学生が不安に感じると思い、余震が発生した後に数回帚と塵取を持って清掃に努めた。その後は、外注業者の清掃員をお願いして、余震のたびに清掃してもらった。

最後に

この東日本大震災で亡くなられた多くの御霊に対しまして、心より深く哀悼の意を表します。

山本研究科長を始め、多くの先生方の積極的なご支援とご協力、そして事務職員の献身的な対応のお蔭で、この難局を曲がりなりにも乗り越えられたのではないかと考えています。本当にありがとうございました。なお、医学系研究科における大震災の復興計画は目覚ましく、先生方からの数多くの詳細な研究計画の提案は、本学はもとより宮城県や文科省を始めとする各省庁が目指す復興計画の項目にも取り入れられるなど、先生方の先端的な研究の素晴らしさには、大いなる敬意を表したいと思います。

東北大学東京分室

東北大学東京分室は、首都圏における本学の活動を支援するため、2003年度に「丸ビル」内に設置されました。その後、2007年6月に「サピアタワー」（東京駅日本橋口）に移転しました（〒100-0005 東京都千代田区丸の内1丁目7番12号 サピアタワー10階）。東京分室は、学術研究に係る情報の発信及び収集、中央省庁、企業等との連絡調整並びに産学連携の推進を図るために設置されており、講演会や研究会、同窓会等の事業などにも使用されています。東京分室には会議室が3つあり（会議室A：73.37 m²、会議室B：84.02 m²、そして会議室C：24.88 m²）、東日本大震災後には、会議室Aが医学系研究科・医学部の支援活動に重要な役割を演じました。その様子が第一部の後半に詳述されています。

東北大学医学部 1号館 1階玄関ロビー（柴原茂樹）

3.11の震災直後に、日光が差し込み明るいこと、容易に脱出可能なこと、警務員室が隣接していることから、1号館1階玄関ロビーに医学系研究科・医学部の災害対策本部が設置されました。写真は医学部1号館玄関ロビーの近況を示します^(写真1,2)。比較のため、震災の夜9:00頃の玄関ロビーの様子を示します^(写真3)。その後、玄関ロビーは、支援物資の貯蔵場所、あるいは物資の配給場所として利用されました。さらに、1号館1階玄関ロビーから見た警務員室の最近の様子です^(写真4)。3.11には、非常用電源により緊急災害対策本部として機能しました。



写真1 医学部1号館玄関ロビーの西側の様子。

平成23年12月、写真3とほぼ同じアングルから撮影された。天井の左に見えるのが、停電下の3.11震災当夜に機能した非常灯です。



写真2 玄関ロビーの奥に見えるロゴマークの拡大。北斗七星を表しています。



写真3 3.11夜の玄関ロビー。約40名の学生や大学院生とその家族達が、石油ストーブを囲み、寒い一夜を過ごしました。写真は、[Shibahara S. \(2012\) Tohoku J. Exp. Med. 226, 1-2](#) より Tohoku University Medical Press（東北ジャーナル刊行会）の許可を得て転載。



写真4 玄関ロビーから見る警務員室。壁に貼り巡らされたテープはひび割れなどの損傷部位を示しており、今後の修復工事の際に利用されます。

3月11日（金）

仙台 14:46 日本における観測史上最大のマグニチュード（Mw）9.0 を記録した東北地方太平洋沖地震（仙台震度6強）が発生。激しい揺れが数分間続いた。その後、余震がある中を医学系研究科の教職員ならびに学生は、全員屋外に避難。1号館前に集合し、当日の出勤者、登校者全員の無事を確認後、五十嵐和彦医学系研究科副研究科長の指示により解散、帰宅となった（15時半頃）。解散時の天候は、雪であった。

3月11日（金）

- ・平成22年度医学部医学科3年次基礎医学修練発表会
- ・1号館玄関ロビーに災害対策本部を設置
- ・学生の避難所として星陵体育館を開放
- ・事務職員による各棟の確認
- ・ライフライン（電気、ガス、水道）は完全停止
- ・東京分室に集合
- ・布団や食糧等の災害支援物資調達を開始

なお、ライフライン（電気、ガス、水道）は完全停止し、また携帯電話やインターネットによる通信もかなり制限された状態に陥る。多くの教員職員や学生は、広域避難所や私設避難所として開放された医学部星陵体育館等に避難し、多発する地震速報と余震の中、不安な夜を過ごした。

東京 東京出張中の山本雅之医学系研究科長、宮田敏男創生応用医学研究センター長らは、東京分室に集合。出張中の教員の取りまとめを行うとともに、帰宅難民になった大学関係者に場所を提供。宮田センター長が個人的ネットワークを通じて、布団や食糧等の災害支援物資の調達を開始。

3月12日（土）

- ・医学系研究科に東京からの支援物資第一便が到着
- ・携帯電話、インターネットも含めて通信がほとんど不通
- ・有志各人が早朝から各職場の状況を確認
- ・星陵キャンパスは午前中に通電
- ・星陵地区各部局の被害状況を確認、本部へ報告
- ・星陵体育館前で学生による炊き出し
- ・事務職員による各棟の確認
- ・本部から食料等の差し入れ
- ・1号館の電源復帰
- ・夜行便で山本研究科長が東京から布団540組と毛布2,000枚を輸送
- ・1号館電気復旧
- ・4号館電気復旧
- ・5号館電気復旧
- ・動物飼育施設（中央棟）電気・水道復旧

3月12日（土）

仙台 携帯電話、インターネットも含めて通信がほとんど不通の中、組織だった動きが取れる状況にはなく、有志各人が早朝から各職場（各研究室や動物実験室等）の状況を確認。星陵キャンパスは午前中に電気が通じ、自己判断で入館可能な施設から通電を開始。

医学系研究科に東京からの支援物資第一便が到着したのは夕方であった。なおも通信状態は悪く、到着の連絡がスムーズに行われなかったため、医学部1号館前にトラックが到着した時には、受取担当者は不在であった。トラックは、その場にいた学生に従って、星陵体育館に誘導された。受取担当者が星陵体育館に到着したときは、既にトラックから、布団100組の大半が、学生を中心とした避難者によって体育館に運ばれていた。布団を運び込む避難者たちは皆とても嬉しそうであった。そして、受取担当者（赤堀浩司特任准教授）が、医学系研究科が迅速に手配した旨を説明すると、体育館内の避難者から大きな拍手があがった。

東京 宮田センター長が小山株式会社や佐々木寝装（株）を通じて、支援物資第一便の布団100組を東北大学医学部に向けて午前発送。さらに、夜行便で布団540組と毛布2,000枚が発送され、その便に山本研究科長が同乗。



3月11日 ラボ周辺の安全確認応急対応の後に解散となり、自宅確認に戻る大学院生と准教授。



3月12日 大きなひび割れの入った1号館の窓枠



3月12日 生物化学分野の様子



3月12日 1号館2階廊下の被害

3月13日(日)

- ・星陵体育館に避難していた近隣住民はそのまま受け入れを続けた
- ・インターネット (@med.tohoku.ac.jp) と【EAST- 掲示】が復旧
- ・組織的炊き出しが行われる
- ・遺伝子組換動物逃亡や散逸がないことが確認
- ・物資の不足、食糧や生活必需品の不足が顕在化
- ・災害対策本部を1号館2階の中会議室に設営
- ・ご遺体の一時収容先として献体安置室(冷凍室)を提供

- ・東京分室会議室Aに医学部支援本部を設置
- 食糧や緊急用品(乾電池、レトルト食品等)、必需品(粉ミルクや紙おむつ等)の調達・輸送業務を組織的に開始

3月13日(日)

仙台 早朝、支援物資第2便が到着。布団540組と毛布2,000枚は星陵体育館に運ばれ、山本研究科長を本部長とする医学部緊急災害対策本部が医学部1号館中会議室に設置された。有志数名の教職員(吉田隆幸事務長、佐藤羽衣秘書、段孝講師)が本部へ常駐し、教員職員学生の安否ならびに所在の確認をまず行うこととし、災害対策本部の活動として、未曾有の危機的状況を脱するために、①東京分室との連携による支援物資の調達・輸送・受取・配給体制の確立、②被災した教員職員学生の生活支援、③医学系研究科の施設被災への応急対策とその支援、④大学病院ならびに関連および周辺医療機関の支援、の取り組みが始まった。

星陵体育館は震災後、学生の自主活動で炊き出し等が行われていたが、災害対策本部下に置かれ、教員の夜間常駐、学生生協の協力による組織的炊き出しが行われるようになり、キャンパス内に点在し寝泊まりしていた学生や帰宅困難な学生が集められた。また、星陵体育館に避難していた近隣住民はそのまま受け入れを続けた。

なお、災害対策本部の立ち上げ時点で、医学系研究科の動物実験施設で、遺伝子組換動物(マウス)で死亡例が出たものの、逃亡や散逸がないことが確認されていた。また、市内の葬儀場が稼動していないため、病院内で亡くなった患者さんのご遺体をご家族が引き取れず、霊安室が満杯となり、一時的に医学部の献体安置室(冷凍室)でもお預かりすることとした。震災後の通信手段は、携帯電話のドコモ、KDDI、ソフトバンクが東北-関東間の大幅な通信(通話)規制をかけたのに対して、規制をかけなかったウィルコム(伝搬距離が短く、基地局を多数要するので災害に弱いと言われていた)がもっぱらの通信手段であったが、13日夕方には、医学系研究科情報基盤室の努力で、インターネット(@med.tohoku.ac.jp)と【EAST- 掲示】が復旧し、外部との通信手段と学部内の連絡手段が確保された。

一方で、震災後の停電や断水の影響もあり、スーパー・コンビニに長蛇の列ができ、2日後の13日(日)にはほとんどの店のシャッターがおりたため、物資の不足、特に食糧や生活必需品の不足が顕在化した。

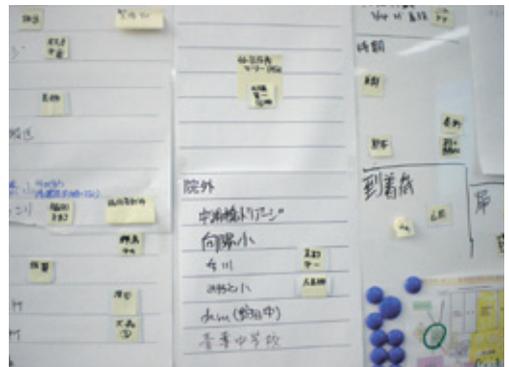
東京 医学部災害対策本部の設置と同時に、東京分室会議室Aに医学部支援本部が設置された(宮田センター長、菊地克史特任教授、赤堀准教授、黒河博文講師)。

生活物資や大学病院で粉ミルク等が不足し始めていることが伝えられ、支援物資、特に食糧や緊急用品(乾電池、レトルト食品等)、必需品(粉ミルクや紙おむつ等)の調達・輸送業務を組織的に開始。しかしながら、それらの商品の買い付け騒ぎが都内で始まっており、店側も例えば、粉ミルクは1人2缶までといった規制をかけていることが伝えられた。

そのような中で、(株)メディカル東友の尽力で、米400kg、粉



3月14日 石巻赤十字病院前駐車場。救急患者の搬入



3月14日 石巻赤十字病院の連絡ボード



3月14日 石巻赤十字病院にて待機中



3月14日 石巻赤十字病院。活動の報告

- ・東北自動車道は閉鎖され、緊急車両のみの通行が許可される状況

3月14日（月）

- ・14日は9時、12時、17時の3回の本部会議が開催
- ・EASTを介した安否情報確認
- ・臨時部局長連絡会議において後期入試の延期、4月下旬まで休校、卒業式の中止、被害状況等の撮影等の報告
- ・全学生に安否確認の照会
- ・大学院入学（進学・編入学）予定者への重要なお知らせを発信
- ・第1回災害対策本部連絡会の開催
- ・動物実験施設エレベーター復旧
- ・東北大学附属図書館医学分館1階のみを開館

- ・福島原発事故に伴う東京電力管内で計画停電
- ・首都圏においても生活必需品や緊急物資が品薄
- ・企業等からの支援の申し出も寄せられる

3月15日（火）

- ・星陵キャンパス水道水の断水続く
- ・ガス、ガソリン、灯油の燃料供給は断たれたまま
- ・JR、地下鉄、バス等の公共交通機関も不通

ミルク170缶、味噌、醤油、塩、カップラーメン、野菜（ジャガイモ、人参等）、カレールー、紙皿、はし、紙コップ等が集められ、14日朝一番のトラックで東京を出発する旨が伝えられた。

なお、交通手段としては、鉄道網が復旧の見込み等の報道もないままに完全に停止しており、地震や津波の被害を受けなかった一般道は動いているものの、比較的被害が少なかった高速道路の東北自動車道は閉鎖され、緊急車両のみの通行が許可される状況であった。

3月14日（月）

仙台 出席可能な医学系研究科教授およびその代理を召集し、9時より災害対策本部会議第1回が開催された。その場で、各研究室の被災状況の報告、教職員学生の安否確認状況の報告、東京分室の医学部支援本部との連携による支援物資の調達状況が報告され、①出勤が可能な教職員は本日より平常勤務とし、各職場の整頓、復旧にあたること、②大学院生および研究生（MD）は職場の整頓、復旧あるいは医療支援にあたること、③帰宅あるいは帰郷が可能な学部生は帰すこと、の指示が災害対策本部長（医学系研究科長）からなされた。また、当面災害対策本部会議を頻回開催し、連絡を密にするとともに、状況把握に努め、迅速な対応をとる方針が示され、14日は9時、12時、17時の3回の本部会議が開催された。その会議を通して、支援物資の受け入れ体制や東京分室との情報交換、ならびにEASTを介した安否情報確認がなされた。医学部2、3号館が使用できない状況の中、東北大学附属図書館医学分館職員の奮闘により、午後から1階のみではあるが、分館が開館した。分館では、新聞も読み、ネットもトイレも使用可能で、学生、職員につかの間のオアシスを提供した^(掲示板1、2、3)。

東京 前日に仙台の災害対策本部から依頼された物資や事項（官公庁対応など）を東京分室支援本部が準備して、配送するための要員が確保された。医学系研究科で必要とする食糧や生活必需品は、善意の支援、寄付に頼るばかりではなく、医学系研究科の経費でも購入する方針が伝えられ、当面、食糧関係の手配はメディカル東友に、寝具関係は小山株式会社をお願いし、配送は業務に支障をきたさない範囲で小山株式会社をお願いする体制がしかれた。

福島原発事故に伴う東京電力管内で計画停電が行われ、乾電池が東京においても一般家電店で売り切れの状況になるなど、首都圏においても生活必需品や緊急物資が品薄となり、調達には種々のルートを通じて行われた。その一方で、企業等からの支援の申し出も寄せられるようになったが、依然東北自動車道は緊急車両の通行しか認められない状況が続いており、配送のパイプは広げられる状況になかった。

3月15日（火）

仙台 星陵キャンパスでは、水は水道水の断水が続いているが、幸いにも井水も利用しているため、一部の水道管が使用できた。また、電気も通じていることから、不便ではあるが、出勤して各研究室や各

掲示板1: 3月14日 医学系研究科>

事務連絡>全職員への通知

タイトル: 安否情報確認

本文:

この度の震災を受けまして、広報室では庶務係と協力し、医学系研究科の安否情報確認を行っています。

各研究室の代表者もしくは代理の方は、現時点(3月14日午後)での情報をご報告下さい。

教員 ○人 / ○人中 確認

大学院生 ○人 / ○人中 確認

研究生 ○人 / ○人中 確認

その他スタッフ ○人 / ○人中 確認

未確認の方の氏名と身分

帰宅困難者の氏名と身分

緊急災害対策本部(1号館2階中会議室)

連絡先: anpi-lab@med.tohoku.ac.jp

掲示板2: 3月14日 医学系研究科>

事務連絡>全職員への通知

タイトル: 研究科内のカープールについての協力依頼

本文:

※こちらの情報に関しては、広報室が代理で掲載しております。

詳細は、総務室(8019)にご確認ください。

現在、職員の通勤がままならない状況にあります。

車で通勤されている方でガソリンに余裕のある方があります。

研究科内の同地域から通勤されている方で

通勤困難な方がおりましたら、同乗させていただきますよう御協力方お願いいたします。

具体的には、以下の手順で実施させていただきます。

1. ご協力いただける方は、1号館1階ロビーの掲示板(ホワイトボード)にお名前、乗車区間、連絡先をご記入くださいますようお願いいたします。
2. 通勤困難な方は1の掲示を閲覧した上、ご協力いただく方に同乗が可能かどうか確認をとっていただく。



3月13日 星陵体育館での避難の様子



3月14日 星陵体育館での避難の様子

- ・ 9 時、12 時、17 時の 3 回の災害対策本部会議が開催
- ・ 山本研究科長による東北地方太平洋沖地震の被災についてのメッセージを HP 配信
- ・ 義援金の受入れ手続きをメール配信
- ・ 支援したいとの会社が続々と名乗り
- ・ 3 号館水道復旧
- ・ 4 号館水道復旧
- ・ EAST で議事内容のメモを研究科内で公示
- ・ 災害対策本部に専用電話回線（内線）が設置
- ・ 物資調達業務継続
- ・ 連絡結果はホワイトボードに書き込まれ、管理
- ・ 輸送計画を検討
- ・ 東京における通信事情は、かなり悪く、電話が繋がらないことも再三
- ・ 計画停電
- ・ 交通機関も乱れる
- ・ 商店が閉店、信号機が消え街が異様な静けさに包まれる

3月16日（水）

- ・ 災害対策本部会議を 9 時（中心メンバー）、12 時（教授会）、17 時（中心メンバー）の 3 回開催

職場の片付けにあたることは可能であった。しかし、ガス、ガソリン、灯油の燃料供給は断たれたままであり、また JR、地下鉄、バス等の公共交通機関も不通であることから、どのように出勤するかが課題となった。

15 日も 9 時、12 時、17 時の 3 回の災害対策本部会議が開催され、カープールによる通勤が議論され、また災害対策本部会議の内容の情報を発信し、指示や要請等を周知させるために、EAST で議事内容のメモを研究科内で公示することとなった。また、災害対策本部に専用電話回線（内線）が設置され、一段と情報の集約化が進んだ^{（掲示板 4、5）}。

東京 東京分室では、分室スタッフのサポートの下、物資調達業務が行われた。この業務の多くは、関係者間の連絡に費やされた。医学系研究科の災害対策本部には、物資輸送のニーズを確認し、手配した物資の輸送状況が報告された。また、既に手配されていた物資に関しては提供者である企業や個人との詳細な打ち合わせ、これから調達する物資に関しては提供してくれそうな企業に対する飛び込みでの電話連絡を行った。トラック輸送をする運送業者に対する輸送便や物資集積の連絡も頻繁に行われた。

メンバーは、ノートパソコンを使ったメールの読み書きと、各自の携帯電話を用いて、連絡作業にあたった。例えば、あるメンバーの記録によると、15 日（火）には 60 通余り、16 日（水）には 100 通弱のメールが飛び交っている。そして、こうした連絡結果は、部屋の真ん中に置かれたホワイトボードに書き込まれ、管理されていた。

多くの物資は、さいたま市浦和のトラック基地から仙台に向けて送り出されていた。そこで、東京分室では、輸送すべき物資の量と、トラックの確保・搭載量を勘案しながら、輸送計画を検討し、トラック基地への物資輸送を手配した。

東京における通信事情は、仙台ほどではないとは言え、かなり悪く、電話が繋がらないことも再三であった。また、東京近郊では、計画停電が無計画（のように思われた）に行われ交通機関も乱れており、メンバーの一人は、東京近郊の自宅と東京分室との往復に苦心していた。停電がある地域では、日中であるにもかかわらず商店が閉店し、また、信号機が消えて、街が異様な静けさに包まれていた。

東京では、物資不足も発生しており、コンビニやスーパーでは米やトイレットペーパー等の入手が困難となっていた。さらに、ガソリンの不足は、仙台同様に深刻であった。企業から物資を無償提供の申し出をいただいたものの、ガソリンが無いためにその物資を浦和のトラック基地まで輸送できず、申し出をお断りしたことも何度かあった。

3月16日（水）

仙台 災害対策本部会議は 9 時（中心メンバー）、12 時（教授会）、17 時（中心メンバー）の 3 回が開催された。入室の可能な建物や研

掲示板3：3月14日 医学系研究科>

事務連絡> 全職員への通知

タイトル：災害対策本部打ち合わせ（3月14日17時）議事メモ

本文：

※こちらの情報に関しては、広報室が代理で掲載しております。

問い合わせは、庶務係（8005、8006）をお願いします。

- ・本日19時～20時の間に物資を積んだトラックが1号館の玄関前に着く。その中には米400キログラムが入っており、生協で炊き出すことになっている。
- ・葛岡斎場が休止中のため、病院で亡くなったご遺体の収容先として、マイナス30度のギャダバー用の部屋を当てることにした。各分野あたり段ボール1箱分のサンプル凍結を受け入れることが可能である。（連絡先8027）
- ・星陵体育館での炊き出し等の対象は、基本的には学内者のみとする。
なお、学生の30%は歯学部の学生であった。
- ・星陵体育館への避難者は学部学生が大多数だが、救援物資が残ったら備蓄する。
- ・認知症のケアを仙台市立第二中学校で活動している学生ボランティアにお願いできないか依頼があったが、大学として

断ってほしい。なお、老年内科にマニュアルのようなものがないか要確認。

- ・2号館は15日朝から日没まで立ち入り可。非常用電源を用いて、ELV2台使用可。PHSは使用不可。通電は各室でブレーカーを上げ、漏電がないか確認。不具合等がなければ16日から使用可。
- ・安否確認のメールをEASTと各教授あてのメールで配信した。
anpi-lab@med.tohoku.ac.jpまで返信を。
- ・教務室で学部学生の安否確認中。医学科76%、保健学科82%確認済。
- ・3号館居住者は臨床講義棟を使用することとなるが、無線アクセスポイントへのアクセスが集中しないよう配慮。有線も使用可能なので、情報基盤室まで相談を。小会議室にもPCを設置している。
- ・本打ち合わせの開催頻度は、今後更新される情報量に応じて減らすことを検討。
- ・TRセンターのフリーザーが空いているので、連絡を（連絡先7122、7895）
- ・16日の教授会は予定通り開催。ただし、退職教授送別会は中止。本日開催予定だった障害科学専攻グランドシンポジウムも中止。
- ・本日は19時まで災害対策本部を設置。

掲示板4: 3月15日 医学系研究科>

事務連絡> 全職員への通知

タイトル: 災害対策本部打ち合わせ (3月15日9時) 議事メモ

本文:

※こちらの情報に関しては、広報室が代理で掲載しております。

問い合わせは、庶務係(8005、8006)をお願いします。

- ・14日19時前、支援物資(米ほか食材、カップラーメン、食器、粉ミルク等)が到着した。米はもう少し届く予定。
- ・星陵体育館残存者は帰宅・帰省を勧める。帰宅・帰省する学生に食材を持たせることを検討。
- ・炊き出しは、教職員用も確保したい。
- ・3号館、損傷度3なら使えると思われるが、余震発生時の避難経路の確保と漏電対策等、遺漏のないように。
- ・ガソリンの入手が厳しいので、カープール(乗合)を提案したい。調整責任者を決めて掲示板等を有効活用したい。事務職員も同様。
- ・福島原発の件は、適宜情報収集・共有を行う。
- ・除染のため、星陵体育館を使用する事態が予想される。汚染者の受け入れは、員数の上限を設定したい。
- ・勤務体制は柔軟に考えたい。
- ・15日22時~26時の間に支援物資を積んだトラックが到着する予定。荷降ろしのため、教職員のボランティアをお願いしたい。
- ・Nature から、大学及び大規模実験施設の



3月15日 石巻市の小学校の教員室で、神戸大学チームとともに養護教員らから避難所の状況聞き取り

被害状況の問い合わせがあったが、大学の公式見解と捉えられないよう、一般的対応をお願いしたい(研究科長の返信内容を紹介)。

- ・16日の教授会は通常通り開催。
- ・星陵体育館での学生のボランティア運営は順調に行われている。帰宅・帰省できない学生への対応が必要。石巻からの入院者の家族の受け入れはお断りし、二中に誘導した。学生の炊き出しで、残ったものは病院にも回す。その他物資も同様に検討。
- ・大学院生の取り扱いについて、帰宅・帰省したい人はOKだが、医学系研究科の使命としては言いにくい。医療への貢献、医学部の復興に尽くしてほしいが、状況を慎重に見極めていきたい。
- ・情報提供・共有の在り方、研究科としての貢献策については、16日の教授会で語りたい。地域医療の要請については病院が対応している。
- ・EASTで議事メモの共有を図る。
- ・3月31日で在留期限が切れる留学生への配慮が必要となる。無料帰国便の運航、大使館からのバスによる迎えが行われている。各国大使館等に確認の上、広報室に情報集約願いたい。留学生は基本的に帰国させる方向で。
- ・合宿からの帰仙困難者等もあるので、サークル単位で確認願いたい。東京以外の地区も帰宅を勧める。
- ・今回は15日17時から開催。



3月15日 石巻市の中学校中庭。避難しながら、救護活動をしている石巻市立病院の看護師から避難所の状況聞き取り

掲示板5：3月15日 医学系研究科>

事務連絡> 全職員への通知

タイトル：災害対策本部打ち合わせ（3月15日17時）議事メモ

本文：

- ・指定避難所（木町通小学校、仙台二中）から、医師派遣の要請があった。大学病院への搬送者のうち、入院の必要のない者が避難所へ搬送されている模様。健康相談、医療的なバックアップ方策を検討する。
- ・本震災に対する研究科としてのステートメントを作成、HPに掲載した。
- ・医療品が送られてくるが、必要物品等、病院で対応する。
- ・内閣府から医療用乾電池、その他用の乾電池、粉ミルクは別ルートからも送られてくる予定。
- ・15日22時～26時到着予定と既報した荷物は、16日7時に変更。
- ・必要物品のうち、医療品は病院で取り纏めた後、本部（3305）で集約。研究科分は直接本部へ。毎日11時に締め切る。
- ・多くの企業から寄附の申し込みがある。義援金は寄附控除の対象となる。
- ・人的支援要請については、病院で対応。
- ・石巻日赤チームからのレポート。病院医師は疲弊している。周辺避難所は医師がおらず、マイクロバスにより医療チームを出すこととする。参加可能者は張替教授に連絡。
- ・民主党桜井充議員から、官庁からの支援が必要な場合は寄せてほしい旨申し入れあり。



3月15日 震災時に用いた学生研究室伝言掲示板（1号館1階）

- ・動物実験センターから、遺伝子組み換えマウス等の逃亡等の照会あり。
- ・大学院入学予定者への周知事項は各分野で対応願いたい。
- ・博士論文の提出期限は4月28日（木）に延期。博士の学位授与申請期間は4月6日（水）～4月12日（火）に変更。
- ・福島原発の影響で、避難者が仙台に来ることが予想されるが、15日は増えていない。今のところ星陵体育館を一部使う程度で対応可。
- ・国立がん研究センターから、測定放射線量のデータ提供依頼があったが、対応は国で一本化すべきである。
- ・原発情報については、大学としても状況把握と共有が図られる予定。
- ・星陵体育館閉鎖の件については、学生の理解は得られたという印象。
- ・炊き出し提供の情報が一部錯綜したが、星陵体育館への避難学生が優先、残れば他に回せる、という趣旨。医学部事務職員には昼食のみ提供する。
- ・3号館12階への水運搬ボランティアについては、16日以降もお願いしたい。
- ・医学分館の1Fは9時から17時まで開放している（既報）。
- ・3号館は耐震強度が低く、安全確保のためもう少し時間が必要。3号館には戻れると思っていない。別のところに居住空間を確保してほしい。3号館が傾いているという風評が出ているので、否定する必要がある。
- ・HPでの安否情報は確認が取れ次第UPしている。連絡モレのないようお願いしたい。
- ・マスコミは情報をほしがっている。積極的に情報は提供すべきだが、サービスの提供はバランスを考慮。

- ・入室の可能な建物や研究室における応急的対応は一段落
- ・食糧以外の物資、医薬品や研究資材、の支援要請も多く寄せられる
- ・2、3名が当番制で待機する状態
- ・山本研究科長による物資調達のご協力のお願いを EAST 配信
- ・2号館水道復旧
- ・4号館エレベーター復旧
- ・5号館エレベーター復旧
- ・支援物資のニーズが多様化し、需要は食糧や需要は生活用品から、医薬品や燃料へとシフトする
- ・大学病院も被害の大きい地域へ医師を派遣
- ・粉ミルク等の必需品を運ぶ
- ・医学系研究科の対策本部に病院から支援の要請
- ・福島原発事故に対しては、星陵体育館を一時避難場所として使用することが決定

3月17日（木）

- ・山本研究科長による物資調達のご協力のお礼を EAST 配信
- ・臨時部局長連絡会議の開催
- ・5号館水道復旧
- ・事務職員の人事は凍結

- ・学部の入学手続きは3月27日（日）まで延長
- ・後期入試は中止
- ・平成23年度入学式は大学本部としての開催を中止

- ・国大協、大学関係の支援物資が届き始める

研究室における応急的対応（通路確保や被災した物品の片付け等）は一段落しつつあり、外部にも目が向くようになり、また災害対策本部を訪れる教職員も増えた。一方で、食糧以外の物資、医薬品や研究資材、の支援要請も多く寄せられるようになり、学部内連絡や東京分室との通信が頻繁になり、対策本部立ち上げから詰めてきた人員以外に、2、3名が当番制で待機する状態となった。

市内の食料品店等は閉店したままの状態が続いていたが、支援物資は食糧が順調に調達され届くようになり、昼食の炊き出し用に米等の食糧を分野ごとに供給できるまでになった。一方で、支援物資のニーズが多様化し、需要は食糧や生活用品から、医薬品や燃料へとシフトしつつあったが、関わる人間も増えたこと、漸く公的機関等の他からの支援物資も届くようになり、多少の混乱も生じた。

16日には大学病院も被害の大きい地域へ医師を派遣するとともに粉ミルク等の必需品を運んだ。さらに、夜には大学病院でシリンジ、注射針、注射用蒸留水もなくなる事態となり、医学系研究科の対策本部に病院から支援の要請があった。しかし、翌朝には一転し、20トンの医薬品、医療材料が大学支援機構から山形大学経由で輸送されることとなった。また、世間も被災地支援への関心が高まっており、食糧支援の要請に想定以上の反響があり、翌日には打ち切らせていただくような事態も起こった。

一方、福島原発事故に対しては、星陵体育館を一時避難場所として使用することが決まり、避難していた学生を退去させることとなった^(掲示板6)。

3月17日（木）

仙台 震災後1週間を経て、危機的状況からは抜け出したとの認識から、今後の対策本部会議は1日1回とすることが伝えられた^(掲示板7,8)。

臨時部局長連絡会議（10時～）での情報提供

- ・仙台市営ガスの復旧には時間がかかる。
- ・教員人事は臨機応変に、事務職員の人事は凍結。
- ・福島原発の影響（測定値【仙台】0.8マイクロシーベルト/h、【新宿】1.2マイクロシーベルト/h）
- ・学部の入学手続きは3月27日（日）まで延長。大学院に関しては保留。
- ・学位記は3月31日（木）まで届けるが、交付は部局に任せる。
- ・後期入試は中止し、調査書とセンター試験の成績を代用する。
- ・平成23年度入学式は大学本部としての開催を中止、これに代わるものは部局で。
- ・学生支援については、学生支援機構等に最大限の配慮を依頼。
- ・被災地外に避難した留学生が自殺未遂（PTSDのケアが必要）。
- ・休校中の学生による、帰省先国立大学の図書館利用を認める動きが出ている。
- ・国大協、大学関係の支援物資が届き始めている。山形大学に集積した後、東北大学へ輸送。この物資は復興に取り組んでいる教職員、

東日本大震災の被災について(平成 23 年 3 月 15 日)

3 月 11 日に発生した巨大地震のために、本研究科も甚大な被害を受けました。多くの方々にご心配をいただきましたが、幸いなことに現時点で研究科内での職員・学生の人的な被害の報告はありません。しかし通信状態が良くないことから、全員の安否はまだ確認されていません。今後も全員の安否の確認に全力を挙げていきます。同時に被害を受けた研究科内の施設・設備の復旧にも職員一同力を合わせて取り組んでいきます。

大変残念なことに、今回の巨大地震では本研究科の位置する仙台市・宮城県および我々とも関係の深い近隣の地域で甚大な被害が生じております。お亡くなりになられた方々に謹んで哀悼の意を表します。大学病院はすでに患者の受け入れや医師の派遣など

を通じて被災された方々への医療支援を行っております。今後は医療面だけではなく、我々の専門性を生かしたさまざまな面からのサポートを被災者の皆様にしていく所存です。

最後になりますが、我々はこれまでも多くの困難を克服してきました。東北大学大学院医学系研究科・医学部は、今回の未曾有の惨事にもひるむことなく研究・教育・診療の再建、さらには地域の再興に取り組んでまいります。このことが、我々に与えられた使命だと考えています。

平成 23 年 3 月 15 日
東北大学大学院医学系研究科長・医学部長
山本 雅之

掲示板 6: 3 月 16 日 医学系研究科 >

事務連絡 > 全職員への通知

タイトル: 物資調達のご協力をお願い

本文:

「現在、物資が絶対的に不足しており、東京や名古屋に東北大学医学部震災支援室を設営し、物資の調達と輸送に取り組んでおります。ただ、全国的に物資が少なく、一般の流通ルートでの確保が大変に難しくなっております。東北大医学部の先生や職員のご関係や知己の方で、食糧品関係

や生活必需品を、それなりに纏まった量をご提供、あるいはご販売いただけますか。東京にいます東北大学医学部震災支援室物資調達係からご連絡を取り、可能な物資は仙台まで送らせていただきます。何とぞよろしくお願い申し上げます。

医学系研究科長 山本雅之

掲示板 7: 3 月 17 日 医学系研究科 >

事務連絡 > 全職員への通知

タイトル: 災害対策本部打ち合わせ (3 月 16 日教授会) 議事メモ

本文:

- ・施設応急危険度判定の最新情報
1~5 号館は「調査済」(使用可)、医学分館は「要注意」(落下物あり)との判定
- ・第 1 次危機対策は終わりに近づいた。星陵体育館は今週中に学生を退去させる(→ 17 日昼までには退去可能との情報)。星陵体育館は、福島からの一時避難所としたい。
- ・宮田教授が物流ルートを確保した。トイレトーパー等、生活物資の要否を確認。今後必要なものがあれば、毎日 10 時まで災害対策本部 (3305) へ。

- ・各分野に米を 2 kg 配分するので、昼食用の炊き出し等に使って欲しい。
- ・不足している医薬品、医療品については、各教員のルートで手配、確保でき次第、災害対策本部に連絡願いたい。交通手段は確保する。地域医療支援の際に併せ、支援物資を運ぶ。
- ・実験動物の処分基準について笠井教授から説明あり。詳細は HP で周知。
- ・山田教授から福島原発関連の情報提供があった。汚染者からの二次被ばくの恐れはなし。汚染された衣服は、袋に入れて 1 ヶ月程度放置する。
- ・死体検案のボランティアを募りたい。舟山教授まで連絡。
- ・病棟の SGT 室に無線アクセスポイントを作った。使用方法は EAST 参照。

大学院学生のために使う趣旨。キャンパス毎に拠点を置き、各部局に配分する。

・各分野での昼食炊き出し用に米を配分

- ・病院には特別措置が講じられる。
- ・今後さらに粉ミルクが届く予定。医療用乾電池は既に到着。
- ・各分野での昼食炊き出し用に米を配分する（既報）。仙台市から届いたミカンも同様。
- ・工学部管理棟は立ち入り禁止となっている。

その他

- ・応急危険度判定の最新情報（赤→立ち入り禁止、黄→注意して使う、白→部局長の許可の下で使用可）

星陵キャンパスでは、医学分館、加齢研管理棟、歯学部研究棟、病院旧外来棟が黄。2号館、3号館の使用許可については病院長の判断が必要。

・安否不明者は、教職員 14 名（全学 90 名）、医学科学生 4 名、保健学科学生 4 名（全学 4,000 名）

- ・4号館は水が出ている。5号館は市水の系統は出ていない。
- ・地下水は飲用できるか→定期検査では問題なしだが、震災による影響は不明。
- ・地下水は1号館玄関前両側、1号館と4号館の間に蛇口がある。医化学実習室（1号館3階）に流しがあるので利用願いたい。
- ・安否不明者は、教職員 14 名（全学 90 名）、医学科学生 4 名、保健学科学生 4 名（全学 4,000 名）。大学院生は各分野単位での把握としているが、未確認があるので協力願いたい。本日より、学籍簿ベースの確認を行う。

・市内の物流は改善の方向と見ている

- ・支援物資が流れてきている。市内の物流は改善の方向と見ている。寝具、紙おむつ等の支援を始めたいが、寝具は沿岸地域の避難所で足りているかどうか、情報を寄せてほしい。
- ・本部からの支援物資は星陵地区の部局で均等に配るのは困難。要望は災害対策本部まで寄せてほしい。

・星陵体育館は本日昼で学生退去

- ・液体窒素の手配が必要。
- ・星陵体育館は本日昼で学生退去。5号館 201 へ移動。片平地区約 50 名、川内・青葉山地区約 2~300 名も退去の方向。対応は次のフェーズへ移行。

・仙台市内ではインフルエンザが流行拡大中

・感染症関連情報を HP で情報発信中

- ・震災後 1 週間後から感染症のリスクが高まる。仙台市内ではインフルエンザが流行拡大中。感染症関連情報を HP で情報発信中。有用な情報を発信したい。

・健康相談等のボランティアを実施

- ・仙台二中避難所の認知症患者の件は、荒井啓行教授に対応いただいた。
- ・木町通小避難所では、石井直人教授のチームが健康相談等のボランティアを実施している。参加可能者は石井教授まで連絡。
- ・大学病院としては沿岸部被災地の対応に重点、仙台地区の相談ボランティア等は研究科でお願いしたい、との意向。
- ・必要な医薬品は災害対策本部（3305）に連絡してほしい。今日明日と医薬品が 20 t 到着する予定なので、この仕分け後に新しい医薬品のリストを作成・送付する。病院長としては、今後、医薬品の購入はせず、寄附のみ受け入れたいとの意向。被害状況を把握し適切

掲示板 8: 3月17日 医学系研究科>

事務連絡> 全職員への通知

タイトル: 物資調達のご協力のお礼

本文:

昨日本欄にて、食糧品関係や生活必需品のご提供をお願いしましたところ、数多くのお申し出をいただきました。ご協力誠にありがとうございました。お陰さまで、用意しておりました輸送量に達するお申し出をいただき、またこの危機を乗り越えるのに足る物資を集めることができました。東北大医学部の先生や職員ならびにご関係や

知己の方に、この場をかりまして、心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。つきましては、本日以降のお申し出は、誠に勝手ながら締め切らせていただきたく存じます。なお、本件につきまして、ご不都合が生じます場合は、ご遠慮なく医学系研究科災害対策本部（内線3305）までご連絡ください。お礼を申し上げますとともに、事情ご理解いただけますよう、何とぞよろしくお願い申し上げます。

震災以来、学生の避難所として機能し、災害対策本部の管理下に置かれていた星陵体育館の避難所としての役割は無事終了した。以下は、13日（日）以降、星陵体育館避難所の管理運営を行った教員（永富良一教授）からのメールである。

星陵体育館学生避難所支援教員の先生方

大変お世話になりました。おかげさまで星陵体育館に避難をしていた学生、教職員は昨日3月17日13時をもって全員体育館での避難生活を終え、それぞれ県外の実家（帰国も含む）、自宅アパートへ移動を完了しました。

以後星陵体育館は、福島県からの被爆者の検査・除染拠点として利用することになります。

学生ボランティアの4名（氏名省略）をはじめ10名あまりの医・歯学部学生諸君はこの間、自らも苦境にあるにも関わらず一致協力して他の学生・教職員あるいは周辺住民の支援にあたり、最後の撤収まで整然とした行動をしました。まさに賞賛に値する活動だったと思います。

なお最後まで行き先が確定しなかった実家が岩手県大槌町にあり連絡がとれなかった〇〇さんは、埼玉県の親族に身を寄せることになりました。

したがって5号館201の二次避難所は現時点では開設の必要はなくなりました。

このメールをもって支援ローテーションは終了といたします。

ご協力いただいた先生方には深く感謝いたします。

それぞれの先生方もご自宅・研究室それぞれの安全確保・復旧に大変なことと思います。

また機会がありましたら、ご協力よろしく願います。

なんとかこの難局を乗り切りましょう。

に届けたい。

・実験動物の安楽死による処分の方針について笠井憲雪動物実験センター長から説明。手に入らないものは維持。22日(火)までは個々の研究者が対応。28日(月)にはセンターとして最終判断を下す。感染実験飼育室については、各実験室で対応願いたい。

・3号館の使用については、来週実施予定の第三者評価の結果を見て判断するが、この結果によっても縮小の対象が異なってくる。

・歯学部で検死の依頼が多い

・歯学部で検死の依頼が多い。協力が必要。

・次回開催は明日18日(金)12時

・燃料(ガス、ガソリン、灯油)は依然入手困難な状況

状況は日々刻々と変化していたが、燃料(ガス、ガソリン、灯油)は依然として入手ができない状況が続いていた。また、部局、分野によっても温度差が生じていたが、災害対策は緊急時対応から、復旧に向けての取組みに焦点が移りつつあった。そこで、被災から免れた研究資材(実験動物、凍結保存されていた細胞やサンプル)を如何に護り維持するかも医学系研究科の重要な関心事であった。特に、動物実験施設のガスを利用したオートクレーブで飼育器具等を滅菌して、クリーン(SPF)を維持していることから、その維持が困難となりつつあった。そこで、実験動物施設から下記のような動物の一部を削減したいとの連絡があった。

・緊急時対応から、復旧に向けての取組みに焦点が移る

・研究資材を何処に護り維持するかも重要な関心事

・動物の一部を削減

本件に関して、当面は実験に取りかかれる状況でないことから、最低限の個体数を維持する方向で積極的に応じた分野や電気式のオートクレーブを提供するので、そのままの維持を希望する分野も少なくなった。

記

○動物実験施設のマウス・ラットの一定の割合を処分する

・処分の基準

生後3週間以内・離乳前の子マウスを間引き、親を残す
不要不急の動物

一般系統で商業的に入手可能な動物

他大学研究機関から入手可能な遺伝子組み換え動物

過密なケージは親を選び5匹以内に縮小

※ただし大学院生等で時間が限られている人は要相談

※ラットの安楽死等で薬品が足りない場合はご相談下さい。

※処分に来れない方のために施設で安楽死による処分の依頼を受け付けています。

系統名、匹数、雌雄、ケージの場所などをメール、FAXでご連絡下さい。

・実施方法

3月22日(火)までに研究者が処分すること

施設に処分の依頼も可能…系統名と雌雄匹数を施設下記担当代表者に通知

3月23日(水)施設職員が削減の状況を確認、入退伝票で確認

削減されていないもの…利用者に処分するよう勧告

24(木)～27日(日)利用者の処分の予備日

28日(月)施設判断で処分



3月17日 支援物資到着の様子



3月17日 届いた支援物資の仕分け作業



3月18日早朝 支援物資到着時の様子



3月18日午前 顕微鏡室での支援物資の仕分け作業

3月18日（金）

仙台 災害本部にはようやく直通電話が設置され、また、災害対策本部議事メモの EAST 掲示の様式も変更された。

東京分室の活躍により、支援物資は順調に供給され、分野ごとへの食糧も米ばかりではなく、ようやく届くようになった生鮮食料品も配給できるようになった。市内のスーパーマーケットも営業時間を短縮してではあるが開店するところも現れてきた。そのような背景をもとに、東京分室の緊急時支援活動は震災後1週間の緊急事態を乗り越えるのに十二分に役割を果たしたので、今後は1週間をかけて収束することとなった。

3月18日

- ・医学系研究科災害対策本部に直通電話を設置
- ・総務部総務課長名による3連休の緊急連絡体制等のご協力について連絡
- ・医学部学生全員の安否確認完了
- ・2号館立ち入り禁止解除、電気・エレベーター復旧
- ・医療支援用緊急車両はガソリンが優先的に入手できる
- ・東京分室を拠点とした物流ルートは来週で終了
- ・本研究科の被災状況は、英語版HPで公開
- ・星陵体育館は原発被災者の一時避難場所とする
- ・学生ボランティアの参加を募る
- ・星陵地区での放射線量はゆっくりと低下
- ・大学院の入学手続きは3月22日から29日に変更
- ・実験用動物は7割キープという方針
- ・災害対策本部は連休中も稼働

<重要> 医学系研究科災害対策本部の連絡先

配信者 佐藤 龍彦 配信日 2011/03/18

種別 掲示板-医学系研究科>事務連絡>全職員への通知
添付ファイル

内容 1号館2階中会議室に設置しております、医学系研究科災害対策本部に直通電話を設置しましたのでお知らせします。

災害対策本部

717-8078（直通）

3305（内線）

271-3737（時間外※守衛室）

災害対策本部議事メモ（3月18日）

配信者 佐藤 龍彦 配信日 2011/03/18

種別 掲示板-医学系研究科>事務連絡>全職員への通知
添付ファイル

内容 災害対策本部議事メモをEAST掲示板に掲載しておりましたが、今後は、EASTログイン後のトップページに開設した「震災緊急体制について」にその他の情報と併せて掲載することとしますので、ご注意願います。

タイトル：生鮮食品の配布について（1号館1階）

本文：

※こちらの情報に関しては、広報室が代理で掲載しております。

問い合わせは、災害対策本部（3305）にお願いします。

本日、只今より、教職員を対象に生鮮食品の配布を行います。お手数ですが、1号館1階までお越しいただきますようお願いいたします。数などに関しましては、現場でご確認ください。

以下は、18日に出された対策本部会議の議事メモである。

災害対策本部打ち合わせ（3月18日12時）議事メモ

- ・本日6時半から9時の間に荷物が届いた。
- ・米の在庫や連休中の非常食を各分野に配付する。他の食材も22日以降に配付するが、連休中の配付は行わない。
- ・緊急支援物資は災害対策本部（3305）または財務室長まで。
- ・医療用電池、粉ミルクが届いている。避難所等に支援に行く場合は数量、用途、責任者等を確認した上で払い出す。
- ・大人用、子供用紙おむつ、生理用品、非常用食料も届いている。善意に応えるよう、用途は記録する。常識的な用途、数量の範囲で配布したい。
- ・癌研究所から医薬品が届く予定。
- ・ワタミから支援申し入れがあるようだが、詳細確認中。
- ・避難所等で何が足りないかは刻々と変化する。阪神大震災時の経験上、1カ所に配つたら他の避難所等に物資が移動することはないので、必要なものが何か見極めて有効活用を図ることが必要。
- ・医療支援用緊急車両はガソリンが優先的に入手できる。他県での申請が早い。ガソリンは高速道路SAが入れやすい。
- ・東京分室を拠点とした物流ルートは来週で終了。丸山教授、朝倉教授が東京分室で学生支援にあたっている。教育関係のネットワークによる支援要請も終了。緊急支援体制は終了し、通常の支援体制に移行。
- ・1号館の浄化水槽に水漏れがあり、市水は使えない。
- ・電気式オートクレーブを活用したい。各研究室から集約の呼びかけを行いたい。
- ・本研究科の被災状況は、英語版HPで公開している。
- ・本日から、星陵体育館は原発被災者の一時避難場所とする。体育館の暖房については、本日夕方、本部から灯油が届く予定なので優先的に回す。病院正面玄関からの案内地図を作成した。学生ボランティアの参加を募っている。
- ・星陵地区での放射線量はゆっくりと低下している。風向きの問題もあるが、今のところ問題なし。
- ・石井サイクロトロン・RIセンター長からの原発情報。コンクリートが破壊したら半径80kmの避難命令が出されるが、運転中の事故ではないので、飛散量は少ない。冷却することができれば沈静化が見込まれる。
- ・大学院の入学手続きは3月22日から29日に変更することを周知済。入学の意思確認は口頭ではなく、メールで大学院教務係まで。
- ・実験用動物は7割キープという方針。日程は弾力的に運用する。滅菌に協力を。
- ・災害対策本部は連休中も稼働。直通電話設置を検討している。
- ・被災地域のスライド投影。
- ・次回開催は22日（火）12時

（以上）

掲示板9：3月18日 医学系研究科>

事務連絡> 全職員への通知

タイトル：附属動物実験施設の状況（3/18）

本文：

医学系研究科附属動物実験施設の状況

平成23年3月18日・附属動物実験施設

当施設で維持している現在のマウス・ラット飼育の状況をお知らせします。

当施設で維持している実験動物の飼料、床敷きの量は1ヶ月間ほどの備蓄はあります。しかし、ガスの供給がなく蒸気が使えないためにオートクレーブが使用できず、飼育器材を滅菌できません。施設としては、ギリギリのところまでSPFを維持したいと考えております。一旦病原菌が入ってしまうと当施設のような大規模コロニーでは、病原菌根絶は極めて難しくなります。研究データにも重大な影響が生じる可能性もあります。

ケージの数を少なくすること、ケージ交換頻度を減らすことで、あと2週間程度の現状維持の余力はあります。今後は、各研究者にご協力をいただいて小型のオートクレーブでチップを滅菌する方法も検討中です。なんとかガス／蒸気が復旧するまでSPF維持に、さらには重要な遺伝子改変マウス等の維持に全力をそそぐ所存です。

動物の処置については、大事なネズミ達ですから、研究者の皆さんのご事情をきちんと理解したうえで対処し、全体の利益を考えたいと思います。

また来週以降、精子凍結保存サービスの提供が可能になると思われます。詳細は来週お知らせします。

何かご不明な点や、お気づきのこと、ご提案がありましたら施設の担当者までご連絡ください。皆さんと心を1つにして苦難を乗り越えたいと思います。何とぞよろしく願いをいたします。

動物実験施設に関しても、災害対策本部会議においても議論され、7割の動物を維持することと、各分野の電気式オートクレーブの利用が決まり、以下の連絡が動物実験施設からなされた^(掲載版9)。

3月19-21日

3月19日(土)

- ・宮城県保健福祉部薬務課から医薬品等の提供の申し入れ
- ・財務部から災害に伴う補正設備、支援物資のリストアップの事前連絡

3月21日(月)

- ・星陵パワーセンターへの都市ガス供給開始

3月22日(火)

- ・大学災害対策本部長から職員の被災状況等調べの依頼
- ・3号館立ち入り禁止解除、電気復旧
- ・大地震による緊急事態からのサバイバルのステージは完全に脱する
- ・施設や設備の復旧、日常業務や研究活動の再開にシフト
- ・常設の災害対策本部は3月25日(震災後2週間)で撤収
- ・液体窒素の供給も可能
- ・震災寄附金を受け入れるためのシステムを作るためにワーキンググループを立ち上げる予定
- ・研究科内の職員の安否については全員無事であることを確認
- ・授業は4月25日から開始
- ・交通機関の不通等に伴い宿泊を要する場合、片平会館に宿泊可能
- ・研究科HPに助成金に関するバナーを設置。
- ・助成金の名称は「東北大学医学部震災復興助成金」とする。

仙台 連休であったが、災害対策本部は当番制で稼働し、支援物資は順調に届いた。

東京 分室の支援機能を収束させる準備に入った。

3月22-25日

仙台 大地震による緊急事態からのサバイバル、如何に教職員や学生の衣食住を確保し、災害の影響を最小限に留め、立ち直るためのステージは完全に脱した。災害対策活動の焦点や関心は、施設や設備の復旧、日常業務や研究活動の再開にシフトしてきた。

対策本部会議は4月28日まで継続されたが、常設の災害対策本部は3月25日(震災後2週間)でその役目を果たして撤収することになった。震災発生から約2週間後には、いかに復興すべきか、具体的な復興計画案も考えられるほどになった。

災害対策本部打ち合わせ(3月22日12時) 議事メモ

- ・星陵パワーセンターに通常の50%の都市ガスがきて、病院での器具の滅菌、シーツ等の洗濯等も可能となった。また、遅くとも今週の木曜日以降には動物実験施設でのオートクレーブにも午後8時から翌朝6時までの時間で使用できることとなっている。
- ・液体窒素の供給も可能となった。
- ・研究科として購入した乾電池を不足している方に提供するので災害対策本部まで取りに来ていただきたい。
- ・紙おむつ、ウェットティッシュ及び衛生用品について、教職員用に配布するので災害対策本部まで取りに来ていただきたい。
- ・粉ミルクの在庫があるので、避難所に持参する場合や個人で使用する場合でも必要な場合は災害対策本部まで取りに来ていただきたい。
- ・震災寄附金を受け入れるためのシステムを作るためにワーキンググループを立ち上げる予定である。個人の立場で寄附金(委任経理金)を受け入れる場合は財務室経理係に問い合わせいただきたい。研究科への寄附についても震災寄附口座を準備する予定である。
- ・苫小牧の王子製紙等からトイレトーパー、ティッシュペーパー、紙おむつをいただいたので、不足している場合は声をかけていただきたい。
- ・研究科内の職員の安否については全員無事であることを確認した。
- ・建物の被害状況については、今週中に取りまとめる。
- ・物品の被害状況については、災害報告書(配布資料)を財務室経理係でまとめて、第1回目は3月23日まで、第2回目は3月28日まで

で提出することになっている。なお、こわれた可能性のあるものも含めて報告すること。

- ・吉成にあるJSTの建物を東北大学が借り上げて、実験室が壊れた研究室に提供することを考えている。
- ・共通機器室にある高額機器の動作確認をする必要があるため、共通機器室運営小委員会のメンバーを中心に被害状況を今週の金曜日の午前中にまとめる。
- ・動物実験施設について、①空調のバランスがくずれている。②床敷きが40キロ入手可能である。③筑波大学から滅菌床敷500キロが今週金曜日に送られてくる。④オートクレーブのボランティアを明日から願います。⑤精子の保存キットが入手可能なので必要な場合は申し出願います。⑥マウス、ラットは20%の削減の協力をいただいた。
- ・食料の配給は本日で終了するが、今後、米が送られてきたら配給する予定である。
- ・3号館については本日から通電が開始された。水道はまだ先になる。
- ・建物の応急災害診断の判定結果は、「黄色」は注意して使用することで、「赤」は倒壊するので立入禁止ということである。
- ・授業は4月25日から開始されるので、その準備をお願いしたい。
- ・文科省科研費の繰越申請が間に合わなかった方はこれからも申請可能である。
- ・研究環境の早期復旧に向けた作業ガイドが示されたので、参考に。
- ・緊急に修繕、修理を行う必要がある場合には、事前着工届の提出が必要。研究設備も同様の取り扱い。臨床分野については、病院総務課で取り纏める。既に医学系研究科に提出されたものについては、病院に引き継ぐ。共同実験室については五十嵐教授が取り纏めを行う。
- ・事前着工届は修理着手と並行して提出してもよい。
- ・交通機関の不通等に伴い宿泊を要する場合、片平会館（先着順、60名程度）に宿泊可能。希望者は、総務部人事課任用第一係（片平91-4826、4827 携帯090-4044-8083）まで直接連絡。
- ・現住居が損壊した者、現住居が損壊し宿舎が必要な者、家族の安否が不明な者、家族の死亡が確認された者の調査を実施している。24日（木）正午まで、医学部は人事係、病院は総務課総務係まで連絡。
- ・助成金の受入フローを作成した。個人宛の寄附申込みであっても、委任経理処理は必要。窓口は経理係。研究科HPに助成金に関するバナーを設置している。
- ・助成金の名称は「東北大学医学部震災復興助成金」とする。なお、様式を若干修正する。
- ・動物実験施設での電気式オートクレーブの集約（持ち寄り）は中止する。
- ・星陵パワーセンターから動物実験施設への上記供給確認が終了、本日夜には本稼働できる。
- ・精子の保存キットが24日（木）に届く予定なので利用願いたい。
- ・24日（木）8時に、トラックで医薬品が到着する予定。保管場所は

東日本大震災被害からの復興に向けて（平成23年3月22日）

未曾有の大地震と津波から11日が過ぎました。徐々にではありますが、本研究科も復興に向かって歩みだしています。幸いなことに、震災から一週間後の3月18日には、医学部の学部学生全員の安全が確認され、同21日には教職員全員の無事が確認されました。通信事情の復旧が万全でないことから、一部の大学院生・研究生の安否確認はまだ終わっておりませんが、引き続き全力を挙げて確認してまいります。

日が経つにつれて、特に沿岸部を中心として、近隣地域での甚大な被害が明らかになってきました。お亡くなりになられた方々とご遺族に、謹んで哀悼の意を表します。多数にのぼる行方不明者の中から一人でも多くの生還者があることを祈ってやみません。東北大学病院は、地震発生直後から患者受け入れや医師派遣などを通して、被災された方々への医療支援を行ってまいりました。また、医学系研究科も、各自の専門性を活かして、直接的な医療面に留まらない多様なサポートを被災者の皆様にお届けしています。その様子の一部は、本研究科ホームページからご覧頂けます。

地震直後から、全国各地の大学・医療機関・企業・個人の皆様から、物心両面にわたる心温まるご支援を頂いています。皆様の暖かいご支援に、心より御礼申し上げます。頂いた物資は、被災地に向かう医師たちによって被災された方々に届けられています。また、本研究科の復興にも役立たせて頂きます。皆様のご厚情に応えるためにも、今回の悲惨な経験を乗り越えて、教育、研究、そして、それらを通じた社会への貢献に一層邁進してまいります。どうか今後とも、東北大学大学院医学系研究科への皆様のご支援を宜しくお願い申し上げます。

- ・災害対策本部、正午の定例開催終了

3月24日（木）

- ・医学部学生への現況把握の照会
- ・1号館水道復旧
- ・動物実験施設（中央棟）ガス復旧（蒸気のみ）

- ・除染対象者は少ない

- ・慶応大学からペットボトルの水が届く
- ・乳幼児、妊婦、授乳中の者の飲用水として利用

- ・新年度は4月25日からスタート
- ・休校中の学生がボランティアとして医療現場に関わることを検討
- ・歯学部では検死のボランティアでPTSDが出ている
- ・借用していた寝具を返却
- ・今後は復興のフェーズに入る
- ・研究施設、設備の被害を受け、他大学からの教員のリクルートが始まる

1号館2階しかない。

- ・復興に向けた写真等、HPにupしたいので送ってほしい。分野の情報もHPでupする。
- ・石巻の港湾地区は治安が悪いとの情報がある。注意すること。
- ・災害対策本部を金曜日までで撤収する。なお、災害対策本部打ち合わせも今週末までで正午の定例開催は終了し、以後は必要の都度招集する。
- ・明日の24日（木）の本打ち合わせで、集合写真を撮影したい。
- ・次回開催は24日（木）12時

（以上）

災害対策本部打ち合わせ（3月24日12時）議事メモ

- ・1号館の市水は1トンの予備タンクを使って13時頃から通水の見込み。蛇口は1カ所にする等、節水に心掛けてほしい。トイレは5階までは井戸水が通水しているので、上層階の居住者は5階以下のトイレを使って欲しい。
- ・4号館、5号館のエレベーターは復旧しているが、1号館のエレベーター2基の復旧のメドは立たない。
- ・設備の被害届については、経理係で取り纏めるので遺漏のないよう提出してほしい。
- ・教職員の被災状況についても調査を行っている（24日正午締切）。
- ・福島原発の影響による宮城県への避難者は思ったより少なく、除染対象者も少ない。報道を見る限り、一部の使用済核燃料からの発煙があるようである。仙台での放射線量は0.18マイクロシーベルト/h、平常時は0.07マイクロシーベルト/hであるが、全く問題のないレベルである。
- ・放射線による水の汚染については、乳幼児でリスクが高まる。現状では1日1リットルを1年間飲用しても問題ないレベルである。通電して冷却が進めば、落ち着くと思われる。慶応大学からペットボトルの水が届く予定。当初は別の用途に利用する予定だったが、乳幼児、妊婦、授乳中の者の飲用水として利用したい。
- ・宮城県では農作物の汚染レベルを機器故障で測定できない状態。国の食品安全委員会によるリスク評価の結果により、風評や過剰反応は収まる。
- ・宮城県から、沿岸部の保健所が被災したため、避難所の調査を行うボランティアへの協力要請があった。来週以降募りたい。
- ・新年度は4月25日からスタート。変則カリキュラムとなるが各学科、医学教育推進センターで検討中である。学務審議会の教務委員会は、新入生の学年歴を5月5日から始める案を取り纏めた。4月25日からはオリエンテーションなどが開催されるのではないかと。新2年生は部局の判断で4月25日から高次実習等を開始できる。原発の影響によっては、更なる変更もあり得る。
- ・医学科は、最初の数月分を前期のうちに割り振る予定なので協力願いたい。部分的に7時間目を作るのもやむを得ないと考えている。

4月25日は震災復興特別講義でスタートすることを考えている。

- ・保健学科は、カリキュラム作成中である。来週早々に決定する予定。検査の4年生の実習は4月26日から、お盆前までで終了可能。
- ・休校中の学生がボランティアとして医療現場に関わることを検討。歯学部では検死のボランティアでPTSDが出ている。関わり方を慎重に。特に沿岸部は治安が悪化しているため、安全性の確認も必要。関連教員と相談して進めることとする。
- ・借用していた寝具を返却する。トラックの積み込みに協力願いたい。
- ・残っている研究科への支援物資は、引き続き被災地での活用を考えたい。
- ・今後は復興のフェーズに入る。工学研究科は被害が大きく、改修もしくは建て替えを余儀なくされる。医学系研究科で震災関連補正予算を確保するのは厳しい状況。
- ・研究施設、設備の被害を受け、他大学からの教員のリクルートが始まっており、大学としても研究スペースの確保に奔走している。
- ・補正予算の概算要求は、研究科として4月10日頃に取り纏める必要がある。耐震改修や最先端研究基盤の維持、医師の派遣要請等を実現するため、病院とも協力しながら予算を獲得していきたい。
- ・実験用動物の削減措置は終了する。動物実験施設のオートクレーブは昨日19時頃から稼働した。マウス・ラットの床敷き交換を本日午後から行う。
- ・25日（金）の夕方、筑波大から床敷き50キロが届く。3号館12階に運びたいので、ボランティアをお願いしたい（連絡先8174、メールでも可）。
- ・ストレス関連疾患に関する一般向けのステートメントをHPにupしている。
- ・遺伝子組み換え実験に関連したアンケートの依頼が来ている。建設的な意見があれば、今週中に片桐教授まで。
- ・環境安全推進センターから、震災に関連した通知が流れる。イライラが募る時期でもあり、部下に対するコミュニケーションに注意が必要。職員の子どもの不安について、EASTに資料を掲載する。急な相談があればPHS. (5597) まで。
- ・地震災害に伴う設備の被害状況については、医学部で予算執行している分野は医学部経理係、病院で予算執行している分野は病院契約第一係に提出すること。本部には直接提出しないよう注意。
- ・大学院学生の安否確認状況は、786名中785名が確認できた。
- ・震災に伴い、東京分室で業務にあたった場合は出張の扱いとする。避難所に赴いた場合については要検討。教職員で海外に避難した場合は休暇扱いとし、休暇の残数がなくなれば欠勤となるのではないかと。本部からの指示待ち。
- ・災害対策本部は25日（金）午後に撤収し、連絡場所を総務室長席に移す。
- ・明日25日（金）12時からの本打ち合わせは行うが、来週は必要に応じて開催する。



1号館1階ロビーに運ばれた支援物資



各分野に支援物資を配給している様子

- ・動物実験施設のオートクレーブは昨日 19 時頃から稼働
- ・東北ジャーナルで地震に関する情報をオンライン発信希望が出る

- ・東北ジャーナルで地震に関する情報をオンライン発信したい。写真等があれば寄せてほしい。
- ・次回開催は 25 日（金）12 時

（以 上）

3 月 25 日（金）

- ・医学系研究科災害対策本部を中会議室から撤収
- ・学部学生、大学院学生の安否を全て確認
- ・学位記授与に関して、式辞に代えて研究科長からのお祝いの言葉をホームページに掲載する
- ・保健学科の在仙の卒業生の希望により、学位記伝達式に代わる行事を行った

- ・拠点病院等の医局にいる医療従事者への支援
- ・災害対策本部の定例の打ち合わせは本日で終了

3 月 26 日（土）

- ・岡山から支援米 1 トン等が届く

3 月 28 日（月）

- ・総務部研究協力課から産業廃棄物（ガラス破片等）保管用段ボール箱の配布
- ・星陵体育館に配布のフトン 150 組を小山（株）に返却

3 月 29 日（火）

- ・総務部研究協力課から東日本震災における研究環境に関する被災状況調べの依頼
- ・被災学生への支援情報の発信

3 月 30 日（水）

- ・3 号館エレベーター復旧
- ・総務部研究協力課から「物品使用可否判定ラベル」の配布

災害対策本部打ち合わせ（3 月 25 日 12 時）議事メモ

- ・学位記授与に関して、式辞に代えて研究科長からのお祝いの言葉をホームページに掲載する予定である。
- ・保健学科の在仙の卒業生の希望により、学位記伝達式に代わる行事を行った。
- ・学位記の印刷が間に合わず、本部から 3 月 31 日に各研究科に送られてくる予定である。卒業生への学位記伝達については各研究科で行うか、または本部から一括で郵送することになっているが、配布の方法は要検討。
- ・今朝 8 時の便で無洗米 2 トンとレトルト食品 400 箱が送られてきた。本日の 2 時に各分野に配給予定である。
- ・被災地の避難所に行かれる方で支援物資（無洗米、レトルト食品、紙おむつ、粉ミルク、乾電池、衛生用品等）を持参される場合は配布するので声をかけていただきたい。
- ・拠点病院等の医局にいる医療従事者への支援もお願いしたい。
- ・1 号館 1 階で生活支援物資を配布しているということを口コミで広げてもらいたい。
- ・医療品が富谷の宮城県研修所に 10 トントラックで 6 台分入ったので、本日、分けてもらった。
- ・1 号館の水道が 1 トンタンクしか使用できないので節水を心がけてもらいたい。
- ・動物実験施設のオートクレーブは 24 時間稼働可能となった。
- ・1 号館のエレベーターは 2 基とも重度破損の診断がでた。応急修理については時期が未定である。4 号館、5 号館および保健のエレベーターは使用可能である。3 号館のエレベーターは復旧にかなり時間がかかる。
- ・3 号館の建物について
 - ①病院の経営管理課で改修を含めて概算要求をまとめている。
 - ②耐震を含めた全面改修が現実的である。
 - ③委員会を設置して病院と研究科とで協力して取り組んでいく。
- ・5 階の生理・薬理系実習室を使用可能・不可能に区分けして欲しい。なお、3 階の実習室を使用して時間割を組んでいる。
- ・筑波大学から 290 箱の床敷が午後 2 時過ぎに届く予定で、20 名のボランティアの方の協力で 3 号館に運んでいただく予定である。
- ・原発関係については、これからはセシウムが土壌に入っているので食物を通して体に蓄積されるのが問題になるかもしれない。数値に過敏に反応しないで冷静に対応してほしい。
- ・医学系研究科が研究拠点の形成を行うために、復興の概算要求とは別に予算要求を行っていききたいので、ご協力いただきたい。

- ・避難所のエコノミークラス症候群対策として、テルモとグンゼから弾性ソックスを800足寄附していただいた。また、日本静脈学会から2,000足、日本シャウッドから1,000足が病院の対策本部に届くので、避難所に行く場合は活用していただきたい。
- ・山元町の避難所の中でインフルエンザが150人中25人感染しているところがある。気仙沼と塩釜の保健所が機能していない。体育館や公民館が避難所になっているところは混沌としている。小さな集落の避難所のアセスメントを県と一緒にやっていくことになっている。
- ・動物実験施設以外で飼っている動物への支援が必要な場合はお知らせいただきたい。
- ・大学院学生は全員無事であることが確認された。
- ・災害対策本部の定例の打ち合わせは本日で終了し、来週以降は臨時に開催することとする。

(以 上)

東北大学大学院医学系研究科および医学部学位記授与式の式辞に代えて（平成23年3月25日）

本日、東北大学大学院医学系研究科および医学部を修了され、博士、修士、または学士の称号を得られた方々に、心からお慶びを申し上げます。

3月11日に起きた未曾有の大震災により、私たち医学系研究科と医学部は大きな被害を受けました。近隣の地域では、続いて起った大津波により多くの方々家がなくなり、また、お亡くなりになりました。この場を借りて、改めて被災した方々にお見舞いを申し上げ、また、家族・友人を亡くされた方々に心からのお悔やみを申し上げます。このような事情ですので、伝統的な学位記授与式を行うことはあきらめざるを得ません。修了生の学業に対して、終始暖かいご指導を頂いた指導教員の方々、同僚や先輩・後輩の各位、さらに、学生生活を支えて頂いたご家族の皆様列席して頂き、その前で感謝の気持ちを持って学位記を受け取って頂きたいという願いは、今回はかなえることはできませんでした。しかし、修了生諸君のたゆまぬ努力が結実して、本日を迎えることができましたことは、例年と変わらず、私の大きな喜びです。

昨今、我が国の学術研究の目指すべき方向として、「世界最高水準の研究の推進」「新しい学問の創造」「社会への貢献」の3本の柱があげられています。これらは、まさしく私たち研究科・医学部が取り組んできた目標そのものです。東北地方の多くの病院は、私たちの先輩が地域の人々の健康を守るために設立したものです。いま、未曾有の大震災に直面し、困難を極める被災地で、私たちの先輩や同僚たちが献身的な医療活動を行っています。このような社会に対する責任感に溢れた貢献は、世界最高水準の研究推進と合わせて、私の大きな誇りとすることです。

近年、科学技術振興や大学改革の大きな旗印の下で、医学・生命科学研究領域においても、ともしれば医療技術開発や臨床応用の側面が強調されてきたことは否めません。しかし、私たちが本研究科・医学部で取り組み、そして修了生諸君とともに学んできたのは、「科学に取り組む姿勢」であり、また、「科学の精神」なのです。諸君は、本研究科・医学部において、不正を許さない医学者としての姿勢を学ぶとともに、謎と神秘に満ちた自然の法則をいかにして解き明かすのか、また、いかに最短距離で雑多な現象の陰に隠れた基本原理の解明にアプローチするのかに日夜腐心してきました。さらに、実験室や病棟で不断に直面する教科書やマニュアルにない事象に対して、科学の目を持って、合理主義と実証主義で対応することを学びました。そして、批判精神を学び、既存の知識の壁を越えて、自由な発想能力を身につけることに邁進してきたのです。

本日、東北大学大学院医学系研究科・医学部から学位を得られる修了生諸君とともに研鑽を積んだこと、また、現在研究科・医学部に所属して、博士、修士、医師、看護師、検査技師、放射線技師などの称号を目指して日夜努力している学生諸君とともに学ぶことは、私たち東北大学大学院医学系研究科教員にとって誇りとすることです。本日学位を得て、研究科・医学部を旅立つ方々には、今後は東北大学の出身者として、研究あるいは臨床の場で、さらに修練を積み、才能を磨いて頂きたいと思っております。その際には、いつも、本学を卒業するプライド、また、送り出した私たちの名誉を背負っていることを思い出して、困難な課題に直面しても、勇敢に立ち向かって欲しいと希望します。最後に、本日巣立っていく諸君の活躍と幸運をお祈りして、式辞にかわる言葉と致します。



災害対策会議中の様子

医学系研究科は他学部、県庁や市役所を含む他機関に先駆けて、震災直後から緊急対策を行い、その活動を一切とぎらせることなく、復旧、復興に取り組んだ。実際に、震度6強という未曾有の地震に金曜の夕方に見舞われたにも関わらず、週末中に災害対策本部を立ち上げ、教職員・学生の避難所を確保し、寝具・食糧の非常物資の輸送を開始し、翌月曜からの教職員の勤務を確保した。適切な災害時対応マニュアルがあった訳ではない。あったとしても他機関の例からも分かるように想定外の大震災であり、役に立たなかつただろう。偶然仙台にいた人、偶然出張で東京にいた人が、ともに何が必要であるかを見極め、素早く行動したことで、緊急対策や早期の復旧に繋がった。医学系研究科の建物の被害が比較的軽微であったことも幸いした。多くの企業や団体の好意や協力が得られたことも、医療関連機関としての使命感も人々を動かしたことは違いない。しかし最も効果的に機能したのは、震災の影響が少なかった東京に兵站基地（Logistics）としての支援本部が設置され、災害本部との連携で、先手先手と寝具、食糧、医薬品や生活必需品を震災地仙台の市場より早く反応できたことであろう。

3月下旬には水道も復活し、各研究室も片付けがほぼ終了、通常業務に少しずつ従事できるようになった。災害対策本部は、震災後2週間の25日に早くもその役目を終え、撤収されたが、災害対策会議は断続的に期間を広げながら4月末まで継続された。以下はその議事録であるが、そこからは医学系研究科が順調に復旧、復興に向かっていたのが読み取れるであろう。

3月31日（木）

- ・災害対策本部連絡会の開催
- ・震災復興・再生計画の立案の照会を EAST 配信

・4月1日（金）

- ・地震災害に伴う消耗品類の被害状況の照会を EAST 配信
- ・研究協力部産学連携課から東北関東大震災に関する本学の社会貢献に係る現状並びに今後の計画について依頼
- ・仙台での放射線レベルは下がってきている
- ・震災復興計画を立案したい
- ・大学院新入生ガイダンスを5月6日（金）、授業開始を5月9日（月）

災害対策本部打ち合わせ（3月31日12時）議事メモ

- ・ガラス破片等廃棄用の段ボールを本日14時から16時の間、1号館1階で配布する。1分野10箱まで。併せてビニール袋も配布するので、ビニール袋に入れた上で段ボールに入れ、フタはせずに5号館裏の廃棄物集積所に運搬すること。
- 備品番号が貼付している物品を廃棄する場合は、物品返納の手続きが必要となる。
- ・上層階で運搬が難しい場合は一時廊下等の片隅に保管してほしい。
- ・実験用標本スライドの廃棄方法は検討し EAST で周知したい。
- ・臨床系については既に EAST で周知済だが、集積所が2号館と3号館の間となる。
- ・学生の被災状況（所在確認・修学困難等）に関する調査が予定されている。
- 大学院学生については、各教授あて照会中。新入生に入学断念がないよう支援体制について説明願いたい。
- 医学科の学生については、20名程度が被災（家屋損壊等）した。

詳細な支援内容を HP に掲載している。

保健学科の学生については、電話で状況確認中である。EAST へのアクセスの可否も併せて照会している。新 1 年生に対する確認手段を検討している。

- ・経済学部学生 2 名が震災により死亡した。
- ・研究科の教職員は 1 名を除き出勤している。
- ・1 号館のエレベーターは更新対象として施設部、関連業者と交渉中である。応急修理後、稼働可否を診断するのに 20 日程度を要する見込み。
- ・CO₂ ボンベや廃棄物等の運搬のため、荷物限定のエレベーターの設置について、リース業者と交渉中。
- ・間組が損害調査業務を実施しているので、各室への入室等に協力願いたい。
- ・昨日、安全衛生委員会が開催されたが、産業医の巡視の効果が大きかった。上層階のほうが被害が大きかったが、耐震固定を行っていたところは、被害が少なかった。床止めや壁止めされていないチェーン固定の CO₂ ボンベは全て倒れた。今後は床止めや壁止めが必須である。
- ・非常階段に向かう方向の非常口ドアに、鍵が開かないなどの問題点があった。
- ・福島第 1 原発の 4 号機に関しては、沈静化の方向。1 号機と 3 号機も 2 週間くらいで沈静化するだろう。2 号機に関しては数ヶ月を要する見込みで、電源を通して冷却を続ける必要がある。
- ・白煙・黒煙には放射性物質が含まれているが、仙台での放射線レベルは下がってきている。平常時の 0.07 マイクロシーベルト/h に対し、0.17 マイクロシーベルト/h となっている。
- ・セシウムが体内に取り込まれた場合の半減期は 110 日と言われている。核実験が多く行われていた頃には、現在の 20 倍程度取り込んでいる。
- ・現在も 1 日 10 人程度の放射線量に対するサーベイを行っているが、汚染されていない証明を行っているようなもの。科学者として冷静な対応をお願いしたい。
- ・辛酉会への支援物資が大量に届いたため、学生が戻ってくるまでの条件付きで、星陵体育館を貸与している。
- ・60 万円以下の被災物品調査が予定されているので適宜準備をお願いしたい。
- ・震災復興計画を立案したい。4 月 4 日正午締切。
30~40 億円かつ 1~2 年の短期プロジェクトにより、東北地方の復興の核となる研究・教育プロジェクトとしたい。
- ・復興支援の申込みが寄せられていると思うが、本部の窓口は数井理事、海外からの支援申込みについては国際交流支援室で判断する。
- ・他の研究機関から、大学院生受け入れの申し出が寄せられている。情報集約の方法等について広報室で検討。
- ・大学院新入生ガイダンスを 5 月 6 日(金)に、授業開始を 5 月 9 日(月)



1 号館前で到着した支援物資の受け取りに奮闘する事務職員

- ・動物実験の環境は28日に復旧に至る
- ・3号館のエレベーターは復旧
- ・医療スタッフが東北地区外で就職するケースが見受けられる
- ・ライフサイエンスの拠点として、東北の産業復興に寄与したい
- ・医工学研究科が星陵地区の教育基盤を使用することについては協力したい

に予定している、4月1日から学籍はあるので、研究活動に対する指導をお願いしたい。

- ・来年度の学位申請期限を延長する方向。学位審査のスケジュールがタイトになるが、協力願いたい。
- ・動物実験の環境は28日に復旧に至った。利用には万全を期している。実験用動物削減からの復旧に向けたペアリングに協力願いたい。
- ・3号館のエレベーターは復旧した。
- ・3号館の被害状況等について施設部長による説明会開催の要望があったので、大学本部の会議で要請する。
- ・機器の破損に伴い修理を行う場合は事前着工届の手続きが必要。再度EASTで周知する。
- ・備品となっていない生活家電についても、当分の間、廃棄物集積所へ。
- ・医療スタッフが東北地区外で就職するケースが見受けられるが、歯止めが必要ではないか。研究施設・設備の被災により、研究者が他機関に移ることは責められないが、プロジェクトを構築して教員をリクルートする必要がある。ライフサイエンスの拠点として、東北の産業復興に寄与したい。
- ・青葉山地区の被害が大きい。医工学研究科が星陵地区の教育基盤を使用することについては協力したい。
- ・次回開催は来週前半で調整

(以上)

4月5日(火)

- ・災害対策本部連絡会の開催
- ・平成23年度の新入生行事予定表(案)が示される
- ・全学教育科目の学年歴も示される
- ・夏休みは2週間となる
- ・今後の地域医療復興に向けた枠組み作りを提案
- ・東北大学学生のボランティア組織“HARU”のHP(ブログ)が立ち上がる
- ・本震とは揺れ方が違い、別のものが倒れた
- ・保健師が必要とされている
- ・物資を避難所まで運ぶインターフェイスが失われている
- ・HARUは現地で交通整理、物品搬入等を行っている

4月6日(水)

- ・2号館ガス復旧
- ・3号館ガス復旧
- ・4号館ガス復旧
- ・被災建物に関する説明会の開催

災害対策本部打ち合わせ(4月5日12時)議事メモ

- ・平成23年度の新入生行事予定表(案)が示された。5月6日(金)に各部局で新入生オリエンテーションを開催する必要がある。学務サイドで対応願いたい。部局独自に取り組んでいるものについては予定どおり行う。
- ・全学教育科目の学年歴も示された。夏休みは2週間となる。2年生以上は独自のカリキュラムを考えることとなる。
- ・本研究科における震災復興に向けたプロジェクトについては、追加も可能なので提案願いたい。医師・医療系人材育成の観点から、病院でも対応している。内閣府の被災者健康対策チームからの要請もあり、本学が先陣を切らないと遅れを取る可能性がある。崩壊している保健衛生サービスをどのように再生させるかという観点も必要だが、大学としてサポートすることが必要。県からも要請がある予定。
- ・本学としては、今後の地域医療復興に向けた枠組み作りを提案したい。
- ・本部から調査依頼があった「東北関東大震災に関する本学の社会貢献に係る現状並びに今後の計画」について、資料3のとおり取り纏めた。さらに追加があれば寄せてほしい。
- ・県南部への支援が相対的に手薄だったように感じられる。資料4のとおり、学生ボランティアを組織して避難所の運営支援のため、4

月6日（水）からの1カ月間、大学本部がバスをチャーターして山元町に向かうこととなった。保健学科の学生で、ボランティアに参加したい場合、教育の一環として吉沢保健学科長に取り纏めをお願いしたい。ボランティア参加については、最終的に病院卒後研修センターの加賀谷准教授がコーディネートしている。

山元町の避難所の情報は押谷教授が把握している。学生は有資格者ではないため、引率の教員にはサポートをお願いしたい。

- 東北大学学生のボランティア組織“HARU”のHP（ブログ）が立ち上がっている。地域の社会福祉協議会との連絡も密に行っており、学生主体ではあるが安心できる。学生はどちらの組織に参加しても構わない。
- 3号館の安全性について、6日（水）10時から医学部1号館第二講義室で説明会を開催する。
- 1号館のエレベーターについて、修繕のためには、内部で固定している箱（かご）を動かす必要がある。そのための部材が13日に届き、動作系の確認を行う。確認の結果、最短で来週中に稼働の可能性もあるが、不具合があれば再度必要な部材を手配することになる。エレベーターは内部のレールが曲がっている。施設部からは最大限の努力を行うとの回答を得ている。動作系の確認後に制御系の確認が必要。
- 星陵パワーセンター経由で都市ガスを供給している星陵会館、RIセンター、動物実験施設については、明日、明後日頃に都市ガスの復旧が見込まれる。1、4、5号館、保健学科棟については、都市ガスの供給ラインが別なので、復旧の見込みが立っていない。
- 星陵体育館は、病院と辛酉会に対する支援物資の保管場所として使用することとしたため、4月24日まで使用不可。
- 県内の農作物等に対する原発の影響は出ていない。
- 本日、各専攻長・課程長から大学院生向けのアナウンスを行った。来年3月の学位審査の第1次締切を11月15日に変更。これを前提に指導をお願いしたい。
- 遺伝子組換え実験のオンライン申請が始まるが、当該実験従事者は、ISTUによる講習を受講した上で従事者登録が必要となる。現時点での未受講者は78名（離職者等が含まれている可能性）。4月15日（金）16時から17時30分まで、加齢医学研究所スマートエイジング棟1階で補講を行う。
- 受講状況が不明な場合は遺伝子実験センターに照会願いたい。4月以降の実験に支障のないようお願いしたい。
- 次回開催は8日（金）12時

（以上）

災害対策本部打ち合わせ（4月8日12時）議事メモ

- 昨日の余震によるライフラインの状況
- 1号館、4号館、5号館、保健A・B棟は電気・水道とも復旧。
- 1号館以外のエレベーターは専門業者の点検を受けた後に復旧の予



医学部1号館2階セミナー室。薬剤師免許を持つ東北薬科大学の教員の方々の協力により製薬メーカー提供の精神科治療薬を仕分けするスケジュール



医学部1号館2階セミナー室。製薬メーカーから提供された精神科治療薬を岩手県、宮城県、福島県の搬送先医療施設別に仕分け

- ・研究協力部産学連携課から東日本大震災復興に向けた本学の社会貢献に係る今後の構想・計画について照会

最大余震 2012年2月15日現在
4月7日(木)
東北地方太平洋沖地震による巨大余震発生
発生日 平成23年(2011年)4月7日
発生時刻 23時32分
震央 宮城県沖
(北緯 38.2度、東経 141.9度)
震源の深さ 66km
規模 マグニチュード7.2
震度 震度6強: 宮城県仙台市・栗原市
震度6弱: 岩手県一関市、釜石市
宮城県石巻市、岩沼市
(出典: 消防庁災害対策本部平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)について(第144報))

4月8日(金)

- ・災害対策本部連絡会の開催
- ・1号館エレベータの1号機が復帰
- ・国立大学協会から、国立大学における震災復興・防災・日本再生に係る教育・研究組織一覧について照会

4月14日(木)

- ・1号館ガス復旧
- ・5号館ガス復旧
- ・高濃度汚染水中での作業者を大学病院で受

定だが、病院等、公共的要素の高いものが優先される。

- ・動物実験施設、星陵体育館、RIセンターは復旧。
- ・ガスが既に復旧している場合(大口供給契約以外)はそのまま使用できるが、ガス漏れ等があれば、管理係(内線8017)までお知らせ願いたい。
- ・星陵町ブロックはガス管の破損が激しく、修繕作業中である。修繕作業が終われば開栓作業に移る。本日開栓予定だったが明後日以降になる予定との情報あり。
- ・本震とは揺れ方が違い、別のものが倒れている。
- ・宮城県副知事から、山元町への学生ボランティアの派遣要請があり、医学科から50名、保健学科から30名が参加している。医師よりもむしろ保健師が必要とされている。物資を避難所まで運ぶインターフェイスが失われている。看護学科から教員1名と学生2名が行っている。医学科は卒後研修センター経由で派遣している。HARUは現地で交通整理、物品搬入等を行っている。これらの活動は4月24日(日)までで終了。
- ・4月6日(水)10時より、星陵キャンパスの建物の安全性について、西川施設部長に講演していただいた。特に3号館の応急危険度判定について、構造物としての評価は「白」だが、落下物等があったため、主観的判定として「黄」となった。
- ・震災復興プロジェクトとして多くの提案が寄せられた。本研究科としては、人材の流出が問題と考えており、世界の最先端の研究を集積するため、また、社会貢献と最先端研究を車の両輪であるべきとの立場に立って提案を行いたい。

◇社会貢献面における具体的提案

①沿岸部の病院の再建

再編・再構築にあたって、研修医を派遣できるような、中核的で高度化された病院とする必要がある。

②被災病院の医師への対応

石巻市立病院の再建、医師等のキャリアパス、専門性を高めていくための支援として、地域医療研修センターを活用していく。

③医師の育成

沿岸部で多数の開業医が亡くなっている。人材育成の観点から、時限措置による医学部定員増を提案する。講義室は144名が収容可能であり、本震災に際しての対応として、インパクトの強い規模とする必要がある。

◇最先端研究面における具体的提案

- ①東北大学の存在があつてこそライフサイエンスの拠点となり得ることを勘案し、最先端研究拠点を整備し、プロジェクトを重点的に支援する。
- ②阪神・淡路大震災後の神戸市の例や、製鉄産業衰退後のピッツバーグの例のような、医療関連産業の集積を行う。
- ③津波、原発等、未曾有の事態を受け、災害医学研究センター(仮称)を設置し、感染症やPTSD、大規模コホートによる震災影響評価等

を行う。

- ・震災復興プロジェクトにおいては、社会医学と保険学を含む、「保健・医療」が共同して取り組むことを念頭に置く必要がある。
- ・宮城県医師会で、職場を失った医師に対し、① 医局が勤務先を斡旋する、② 大学に戻る意向がある場合は大学で調整する、③ 医師バンクを構築する、といった段階的な進め方での対応を行っている。
- ・情報を都度記録しておく、貴重な資料となる。神戸大の復興プロセスがHPで公開されており、非常に参考になる。
- ・被災地に（内容的に）軽い本やマンガ等を送りたいので、協力願いたい。
- ・女川原発は一部電源が失われているが、順調に冷却が進んでいる。福島第一原発は今まで以上の被害はない。原子炉の損傷の程度は、1号機が70%、2、3号機が30%程度。原子炉格納庫の内部は31シーベルト/hだが、大気中の放射性物質の値は下がっており、水素爆発以降の放射性物質の放出はないと考えられる。
- ・今まで想定してきた原子力事故は7日～20日程度で収束することを前提としていたが、基準の見直しが必要である。浪江町（26マイクロシーベルト/h）等にボランティアに行く場合、できれば屋内の活動が望ましい。
- ・飯館村では6マイクロシーベルト/hで年間50ミリシーベルトとなるが、年間100ミリシーベルトでも、発がんへの有意な影響はない。高濃度汚染水中での作業者を大学病院で受け入れる用意がある。メンタル面での支援もお願いしたい。
- ・基準値以下の野菜・魚の摂取は問題ない。
- ・学生の課外活動について、4月25日（月）以降の再開が前提だが、それ以前に施設の安全性が確認できる場合は柔軟に対応しても構わない旨のアナウンスが大学から行われる予定。星陵体育館は4月25日（月）から使用可。
- ・医工学研究科でも震災復興プロジェクトの提案を行っている。医工連携による本学の英知を結集して対応したい。
- ・次回開催は14日（木）12時

（以上）

災害対策本部打ち合わせ（4月14日12時）議事メモ

- ・1号館、5号館、保健A・B棟は本日ガスが復旧する。保健A・B棟は午前中に開栓終了、午後から5号館、1号館の順で開栓作業を行う。
- ・1号館エレベータ3号機は13日（水）で部材が入り、本日復旧作業に入った。
- ・13日（水）、飯島研究担当理事が訪れ、被災状況に視察を行った。3号館改修の際の移動先（逃げ場）を要望した。また、改修にあたっては、壁・床・天井・配管を含む全面改修が必要である旨、併せて要望した。
- ・研究科の復興計画案について、来週文部科学省に説明する予定である。



医学部1号館エレベーター利用開始時の最終確認

け入れる用意がある

- ・星陵体育館は4月25日(月)から使用可
- ・1号館エレベータ3号機本日復旧作業に入った

- ・「防災医学研究センター」の設置等を検討
- ・同窓会員の安否確認を始める
- ・名誉教授は全員の無事が確認
- ・福島第一原発事故の暫定評価がレベル7に引き上げられる
- ・国際学会の開催等に問題を生ずる可能性がある
- ・今後の計画停電が動物に与える影響は大きい
- ・自家発電装置(非常用電源)及び燃料の確保による対応を考えたい

4月20日(水)

- ・1号館エレベーター復旧

4月21日(木)

- ・市ガスは、1号館9・10階、5号館9階でガス漏れがあり、閉栓中
- ・2・3号館で、上下水道管の破裂が見つかった
- ・東北大学災害復興新生研究機構を作ることが発表された
- ・山元町への学生ボランティアの派遣は22日(金)で終了
- ・5月6日(金)に開催する新入生オリエンテーションは、業者に依頼し、記録を残すこととする

- ・山元町への学生災害ボランティアの派遣は、22日までで終了する予定。
- ・ヨット部艇庫の状況を確認したところ、ヨット2隻が行方不明となっている。ボート部艇庫については、艇の流出はなかったが、一部の艇について修理が必要である。
- ・宮城県保健福祉部長より、保健衛生システムの復興に協力してほしいとの申し入れがあり、15日(金)に打ち合わせを行う予定。これに関連した長期プロジェクトも提案したい。併せて厚労省による、長期避難の影響モニタリングにも協力したい。
- ・大学として防災研究拠点の設置が必要と考えるが、場合によっては本研究科として「防災医学研究センター」の設置等を検討したい。
- ・沿岸部の医師66名が勤務先を失った。そのうち20名は病院医局が勤務先を調整、3~40名は自力再建(開業医等)、10名弱はドクターバンクのようなものができればこれに登録を希望する、という状況。ここでいうドクターバンクとは、県医師会が構築したのではなく、「地域医療再生計画」の枠組みの中で構想中のものである。
- ・気仙沼から石巻にかけて、7病院(730床)が機能を失った。これらは急性期病院ではなく、復興にあたっては石巻日赤等、核を作って機能・人材を集める必要がある。
- ・同窓会員の安否確認を始めた。名誉教授は全員の無事が確認された。今日、各卒業年次の幹事に文書で安否確認をお願いする。今後、医局同窓会を通じた安否確認を行いたい。
- ・カールツァイス社より、震災による顕微鏡の破損に対しては、修理予算の確保の有無にかかわらず、優先的に修理に応ずる旨の申し出があった。ライカ社からは、代替の顕微鏡を貸与できる可能性がある。
- ・研究スペースを失った主に若手の研究者向けに、共通実験室に貸しベンチを設けるので、準備ができ次第アナウンスを行う。
- ・米国でハリケーン・カトリナが襲来した際に活動した「Vision Van」(※車内で眼科診療ができるバス)が、ロシアの航空会社により輸送され、本日病院に到着する予定。
- ・3号館の全面改修に際し、マウス・ラット等の小動物は他の施設に吸収、豚・犬等の大型動物は手術棟を建築し移設することも検討。
- ・大学院生確保のアイデアを寄せてほしい。十分に学習・研究ができることをアピールする必要がある。
- ・福島第一原発事故の暫定評価がレベル7に引き上げられたことに伴い、米国政府が原発付近に近寄らないように勧告を出している。仙台市は原発から120km離れているが、国際学会の開催等に問題を生ずる可能性がある。本研究科のアクティビティが落ちる可能性もあり、積極的に安全性をアピールする必要がある。広報室、本部広報課とも相談して対応したい(既に本研究科のHPに関連するQ&Aを掲載し、英語版も準備中)。
- ・今後の計画停電が動物に与える影響は大きい。研究科として、自家発電装置(非常用電源)及び燃料の確保による対応を考えたい。

・次回開催は21日（木）12時

（以 上）

災害対策本部打ち合わせ（4月21日12時）議事メモ

- ・1号館エレベータ3号機が昨日復旧した。
- ・市ガスは、1号館9・10階、5号館9階でガス漏れがあり、閉栓中である。
- ・2・3号館で、上下水道管の破裂が見つかった。3号館は全面改修を目指したい。
- ・昨日、復興計画案を文部科学省に提示した。高等教育局から、定員増については難しいとの感触を得たが、概算要求を提出する予定。併せて、地域医療研修センターへの被災地医師受け入れポストの設置についても概算要求を提出する予定。
- ・本部の災害対策本部会議（研究環境復旧委員会）で、3号館改修時の居住者・動物の逃げ場とするためのプレハブ建設の要求を行った。
- ・外国人教員に関する調査が行われた結果、全学で322名中52名の外国人教員が帰国していない。本研究科は10名中1名。早急に戻るよう、担当教員から連絡してもらっている。
- ・良陵会館のエレベーターについて、改修工事が6月30日（木）までに終了する予定。
- ・東北大学災害復興・地域再生重点研究事業構想として、東北大学災害復興新生研究機構を作ることが発表された。最先端研究拠点の整備についても24年度概算要求に盛り込む予定。
- ・情報科学研究科から、情報科学と医学の分野が融合した共同プロジェクト研究の提案があった。本研究科としても協力することとし、概算要求は情報科学研究科から提出する予定。
- ・米国大使館と外務省に対し、東北大学の被災状況や放射性物質による汚染が深刻であるというイメージが払拭できないため、秋口あるいは来年春先に、ジョイントで国際会議を開催したいとの意向を伝えたところ、ポジティブな反応が得られた。
- ・原発の圧力容器は90気圧まで耐えられる設計になっている。

原子炉内に燃料棒が存在しない4号機を除くと、燃料棒は1号機が1.65m、2号機が2.1m、3号機が2.25m露出している。5号機、6号機は水面に対してそれぞれマイナス1.5m、マイナス1.8mとなっている。

原子炉内の圧力は、1号機で10気圧とやや高いものの、全て耐用圧力内となっている。

圧力容器内の温度は4号機を除き、1～6号機それぞれ、174℃、140℃、110℃、45℃、22℃となっている。燃料棒が溶ける温度は2,800℃である。

原子炉内の放射線量は、1、4号機を除き、2～6号機それぞれ、30シーベルト/h、16シーベルト/h、36シーベルト/h、34シーベルト/hとなっている。

市街地の放射線量は、南相馬市で5マイクロシーベルト/h、浪江



4月14日 眼科診療バス「Vision Van」被災地支援出発前の様子



4月22日 往診の様子

町で10マイクロシーベルト/hとなっている。5マイクロシーベルト/hを毎日浴びると、年間45ミリシーベルトとなる。

放射線量の高い地域を対象として、今後の線量と健康のチェックを行うことを提案している。広島・長崎の場合、200ミリシーベルト浴びないと発ガンについての有意差が認められなかった。甲状腺ガンを除くと、半減期の長いセシウムの影響によっても、発ガンの有意な増加は認められない。低い線量下での影響について科学的根拠を作り、後世にデータを残す必要がある。

- ・ 県医師会によれば、勤務先を失った医師は66名。そのうち3割は病院医局による勤務先での調整を希望、7割は自力再建、1名はドクターバンクへの登録を希望している。

- ・ 製薬協で20t（約20億円分）の医薬品を集めた。厚労省から、大学病院で使用する場合は保健診療として認めるとの方針が示されている。必要な薬があれば連絡してほしい。

同様に、宮城県にも医薬品の提供があり、病院でのニーズを確認している。また、住商モンブランより、白衣、手術着、約1,000着の寄附オファーがあり、ニーズを確認している。

- ・ 「がんの子供を守る会」から支援物資が届いた。
- ・ 山元町への学生ボランティアの派遣は22日（金）で終了。
- ・ 震災に際しての東北大学の貢献の状況を強くPRする必要がある。本学HPでも震災特集ページを作成する予定。
- ・ 本日15時から17時の間、1号館学生ロビーで支援米、レトルト食品の最終配給を行う。
- ・ 経済産業省による電気の総量規制が行われる見込み。25%の削減を求められ、供給量が規制値を上回ると、全面シャットオフの可能性がある。非常用電源は納期が8月になるが、削減量の補完に使う方法を考えたい。
- ・ 医学部のサークルが受けた被害状況の把握が必要。次回会議までに検討する。長陵同窓会等を通じて、数百万円の寄付の申し出があったので、これを活用した支援を考えていきたい。
- ・ 医学科学生向けに、PTSDに関するアンケートを作成した。保健学科でも必要であれば参考にさせていただきたい。
- ・ 25日（月）から講義が開催される。震災特別講義の実施にご協力願いたい。

また、5月6日（金）に開催する新入生オリエンテーションは、業者に依頼し、記録を残すこととする。

- ・ 次回開催は28日（木）12時

（以 上）

4月25日（月）

- ・ 2～6年生オリエンテーション、授業開始

4月28日（金）

- ・ ヨット、ボートの各学生サークルで、艇の流出・破損を確認

- ・ 一時帰国中の外国人教員は、5月9日（月）で全員帰任

災害対策本部打ち合わせ（4月28日12時）議事メモ

- ・ 1号館9・10階、5号館9階でガス漏れがあったが、状況を確認し、順次閉栓を進める。

- ・ ヨット、ボートの各学生サークルで、艇の流出・破損があった。全学学友会と共同使用しているものもあり、連携して対応したい。

OB会、同窓会からの支援も模索している。

流出したヨットが発見された場合、その撤去費用は所有者が負担することになる。

- ・(被災学生支援のため、三条グラウンドに住居を建設することと関連) 青葉山キャンパスに新設するグラウンドは、大学本部が管理することとなる。三条グラウンドの代替措置として、医学部が優先使用可能との確認を得ている。
- ・学生に対し、修学支援に関するアンケートを実施した結果、住居の全壊は6名、一部損壊は91名だった。授業開始後に転居する者は12名だが、通学に支障がある者はなかった。また、緊急経済支援の必要な者は34名。第一次補正予算で1,000名分、6億円が措置されているので、授業料減免や奨学金等、安心して修学できる方法を早急に検討していきたい。
- ・学生厚生委員会により、震災後の学生の状況に関するアンケートを実施した。深刻なPTSDのような例は見られなかったが、アンケートに回答していない者に対するケアの必要性も念頭に置きたい。
- ・阪神・淡路大震災では、留学生がアルバイト先を失ったり、住居からの退去を求められる例があった。また、一時帰国中の留学生が、両親が納得できずに再来日できないケースがある。なお、英語版HPの更新頻度を上げるよう、広報室に働きかけている。
- ・一時帰国中の外国人教員は、5月9日(月)で全員帰任。留学生の8割は一時帰国したが、そのうち9割は再来日する予定。
- ・中外製薬から、医学科2名×5~6年間の授業料支援等の申し入れがあった。
- ・長陵同窓会の安否確認の結果、名誉教授の人的被害はなかった。さらに、クラス幹事あて、同窓生の安否確認依頼中。
- ・4月27日(水)現在、震災復興助成金として45件、約780万円が寄せられている。
関東長陵同窓会では、構成員全員に助成依頼の連絡を行った。
大学全体としては約6,300万円が寄せられ、さらに小松製作所より年間4,000万円で10年間の寄附申込みがあった。
- ・東北大学災害復興・地域再生重点研究事業構想が示された。この構想に基づき、災害復興新生研究機構が設置されたが、災害対策に限らず、最先端の研究拠点を造るという形が理想という考え方もあり、5月2日(月)正午までに追加提案を求められている。基本的に研究科長が対応するが、追加提案がある場合は申し出てほしい。
- ・登米市より、1週間に1回程度、長期的に専門的健康教育ができる者を派遣してほしいと依頼があった。求められている人材等について、昨日の教授会で設置を決定した「地域保健支援センター」と広報室で連携して対応を進めたい。また、対応可能な場合は目黒教授に連絡してほしい。
- ・気仙沼では、河川の逆流等で約6,000名の在宅難民が出ており、食料等も不足している。保健師のサポートが必要と考えられるので「地域保健支援センター」による対応について、辻センター長等と調整



看護学専攻ボランティア被災地支援の様子



学生ボランティア被災地支援の様子

- ・留学生の8割は一時帰国したが、そのうち9割は再来日する予定
- ・東北大学災害復興・地域再生重点研究事業構想が示された

する。

- ・製薬協で集めた20億円分の医薬品について、厚労省からの正式な通達があり、保険診療として使えるようになった。大学病院でリクエストしたものはほぼ入手可能である。
- ・平成24年度概算要求で、地域医療研究センター及び医学部定員の20名増を提出した。
- ・緊急案件がなければ次週は開催せず、次回開催については別途連絡する。

(以 上)



3月24日(木)撮影

医学系研究科・医学部災害対策本部は、想定外の巨大災害に対して、役職・所属に関係なく「今やるべき」ことを考え立ち向かった。

この日、復旧から復興への移行を機に集合写真を撮影した。

撮影に参加出来なかったが、尽力したメンバーが数多くいたことも忘れてはならない。



以上のように、災害対策本部掲示板及び議事メモは、4月28日をもって終了した。この日以降の行事は以下の通りである。

- 5月 6日 新入生オリエンテーション、大学院入学者ガイダンス
- 5月21日 医学部新入生健康診断
- 6月17日 合同病院説明会（4年～6年）
- 6月24日 マッチング説明会
- 7月27日～28日
東北大学オープンキャンパス
- 9月 1日 大学院入学試験
- 9月14日～ 卒業試験
- 10月15日 6年次OSCE
- 10月28日 合同慰霊祭
- 11月18日 高次修練説明会
- 11月25日 医師国家試験説明会
- 12月16日 共用試験OSCE、CBT説明会（4年）

平成24年

- 1月21日 共用試験OSCE（4年）
- 1月26日 大学院入学試験
- 1月27日 臨床医学修練（3次）説明会、キャリアパス懇談会
- 2月 6日 学部AO入学試験（Ⅲ期）
- 2月 9日 共用試験CBT（4年）
- 2月11日～13日 医師国家試験
（大学の学事日程では無い）
- 2月25日～26日 学部一般選抜入学試験
（前期日程）
- 3月 2日 マッチング説明会、長陵協議会関連病院説明会
- 3月 9日 遺骨返還式
- 3月27日 学位記授与式、学位記伝達式



4月25日 医学部オリエンテーション開始前の黙祷



4月25日 吉沢豊子保健学科長によるオリエンテーションの講話



4月25日 山本研究科長とウェアセレモニー代表田代亮介さん



4月25日 ウェアセレモニーで井樋栄二教授より白衣を受け取る様子



4月25日 山田章吾教授による放射線についての講義



4月25日 保健学科検査技術学専攻ウェアセレモニーの様子



5月6日 保健学科前での新入生サークル勧誘



5月6日 星陵会館前での新入生サークル勧誘



5月6日 大学院オリエンテーション VTRによる総長式辞の様子



5月6日 医学部新入生オリエンテーションの様子